

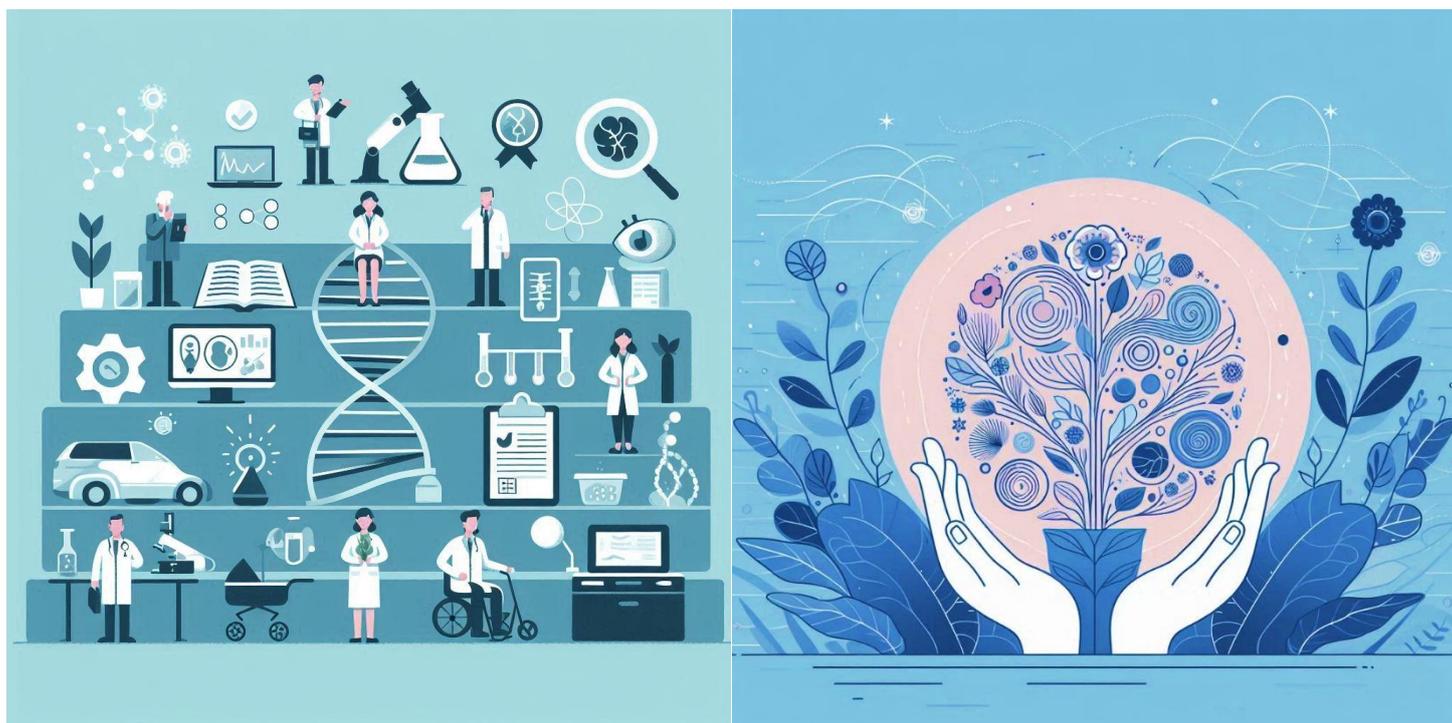
お茶の水女子大学
ヒューマンライフイノベーション開発研究機構

ヒューマンライフサイエンス研究所・人間発達教育科学研究所

第4期 中間評価 報告書

2022年度～2024年10月

健康で心豊かな「人生」を科学する
～ヒューマンライフイノベーションの創出と挑戦～



お茶の水女子大学
Ochanomizu University



ヒューマンライフイノベーション開発研究機構
Organization for Human Life Innovation and Development

第1部

ヒューマンライフィノベーション開発研究機構

【目次】

はじめに（ヒューマンライフィノベーション開発研究機構長あいさつ）	1
1. 機構概要	2
2. 機構における活動実績	4
・ 論文発表数の状況	4
・ 国際学会等での発表の状況	4
・ 国際学会等での講演等	5
・ シンポジウム等開催実績	5
・ ニュースリリース件数	9
・ 受託・共同研究の状況	9
3. 機構における文理融合型共同研究（学内科研）	10
4. 機構主催および学内連携イベント	12
・ ヒューマンライフィノベーション開発研究機構シンポジウム	12
・ ヒューマンライフィノベーション開発研究機構・人間発達教育科学研究所共催 国際セミナー	19
・ 文理融合学内科研 研究発表会	22
・ ヒューマンライフィノベーション開発研究機構 2023 年度研究交流会	24
・ その他の学内連携イベント	27
・ 資料① 国立大学法人お茶の水女子大学 ヒューマンライフィノベーション開発研究機構規則	i
・ 資料② ヒューマンライフィノベーション開発研究機構 第3期最終評価実施報告書	iv

はじめに

お茶の水女子大学は、1875年11月29日に、女性のための日本初の高等教育機関「東京女子師範学校」として創設され、その後144年にわたって、女子教育の先達として道を切り拓いて来ました。現在も本学では、これまでに築かれた歴史と伝統を基盤として、広い視野と豊かな感性をもって未来を担う女性たちの育成に取り組んでいます。

2016年度の第3期中期目標・中期計画期間になり、従来から掲げてきたミッションである「グローバル女性リーダーの育成」に加え「人が一生を通じて心身ともに健康で幸せに暮らすための研究と教育を推進する」ことを新たな目標として掲げ、2016年4月にヒューマンライフイノベーション開発研究機構を設置しました。

これは、本学にとって2015年度に設置した「グローバル女性リーダー育成研究機構」と双璧となる文理融合の研究機構で、少子高齢化におけるさまざまな課題の解決に向けた研究を推進するための大学として最も力を入れている取組みのひとつです。

お茶の水女子大学は大学・大学院の他に附属学校園があり、保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、さらに2016年には、文京区立のこども園も開設しました。さまざまなライフステージの「こころ」と「からだ」の両面から、文理融合、かつ、学際的な取組みとして、ひとときユニークな組織として、本学の研究活動を牽引していくためにも当機構は重要な役割を担っており、この環境を生かした活動が期待されています。

機構のもとには、ヒューマンライフサイエンス研究所(旧ヒューマンライフイノベーション研究所)と人間発達教育科学研究所を設置し、それぞれの強みを生かすとともに、協奏して研究・開発を行うこととしています。

生命科学・生活科学による身体的・環境的側面並びに人間発達科学・教育科学による精神的・社会的側面から、国内外の研究機関や企業と連携することによって、「からだ」と「こころ」の両面からの研究を推進します。そして、これらの研究を通じて、人が健康で心豊かに過ごし生活環境の向上を意図したイノベーション実現のための国際的研究拠点としてその成果を社会に向け発信することを目指します。

今後とも、本機構においては、両研究所の強みを活かしながら、異分野融合的な教育・研究を行うとともに、知を備えた人材養成を行っていきます。

本機構のさらなる発展をご期待ください。

令和7年2月

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構長

理事・副学長（研究・国際交流・男女共同参画担当）

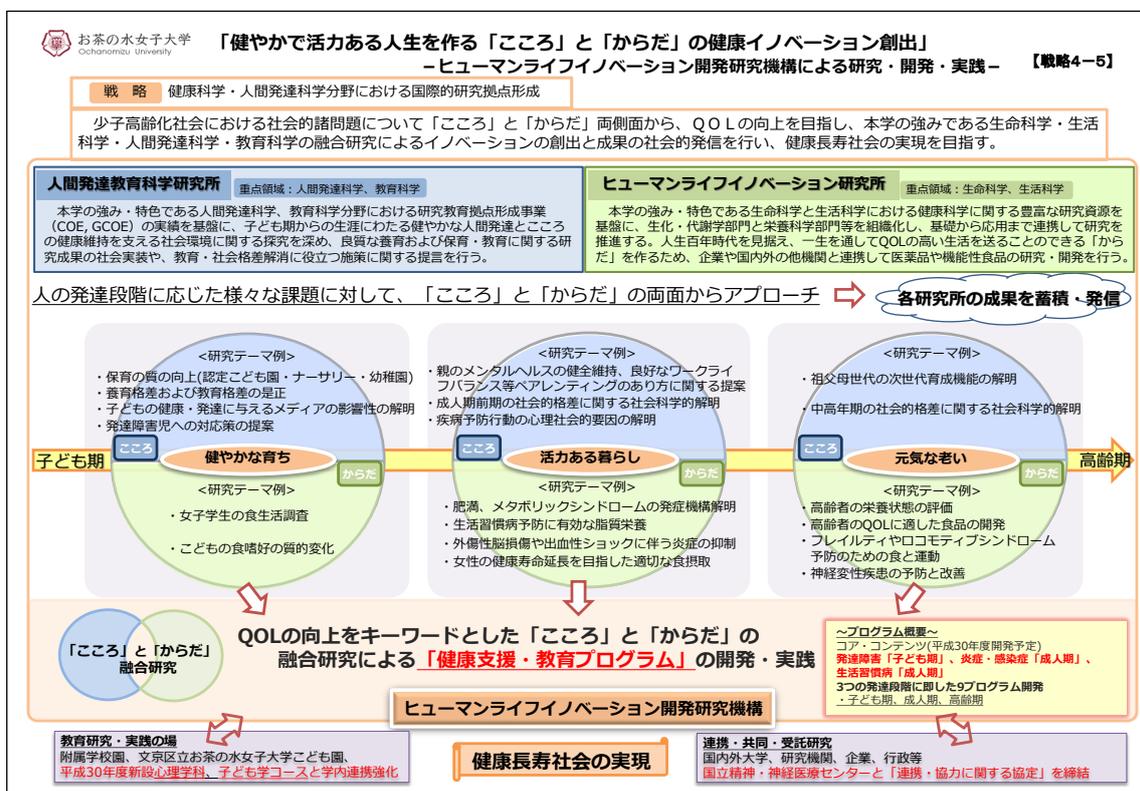
石井クンツ昌子

1. 機構概要

我が国は、グローバル化と少子高齢化の加速に伴う人口構造の変化などによる社会構造の変化に伴い、新たな社会的諸課題に直面している。お茶の水女子大学では、それら課題の解決に向け、研究・開発を統合的に推進する国際的研究拠点「ヒューマンライフイノベーション開発研究機構」を2016年4月に開設した。

本機構の下に、「ヒューマンライフサイエンス研究所（2022年、ヒューマンライフイノベーション研究所から名称変更）」と「人間発達教育科学研究所」を設置し、それぞれ本学の強みを活かして、生命科学・生活科学による身体的・環境的側面ならびに人間発達科学・教育科学による精神的・社会的側面から、国内外の研究機関や企業と連携することによって、「からだ」と「こころ」の両面からの研究を推進する。また、幼児期から高齢期までの人の発達段階に即して、人が健康で心豊かに過ごし生活環境を向上させる革新的解決策を創出し、その成果を社会に向け発信することを目指す。

本機構では、第3期中期計画（2016～2021年度）の実績と評価（巻末資料②参照）をふまえ、超高齢化社会に対応できる「こころとからだの健康」を増進維持するため、「食」をこころ（発達科学研究）とからだ（ライフサイエンス研究）の橋渡しとして焦点を当て、ヒューマンライフサイエンス研究所と人間発達科学研究所が連携した研究推進を、第4期中期計画（2022～2027年度）の目標としている。さらに、企業・研究機関等と連携して、先端研究拠点を形成するとともに、知的財産の創出や実用的なアウトカムを目指した実装研究も進める。



【ヒューマンライフサイエンス研究所 (IHLS)】 <http://www-w.cf.ocha.ac.jp/ihli/>

ヒューマンライフサイエンス研究所 (Institute for Human Life Science) は、本学の生命科学・生活科学を研究テーマとする学内教員を組織し、人が生涯を通じて健康で心豊かな生活を過ごすための研究・開発と、安全・安心な社会環境構築のためのイノベーション創出を目指して、2016年4月に設置されました。2022年4月、組織改編のため名称をヒューマンライフサイエンス研究所へ変更しました。

少子高齢化社会における社会的諸問題に対応して、「こころ」と「からだ」の両側面から、

- ① 健やかで活力と意欲ある子どもたちの育成
- ② 一生を通じた QOL の向上と健康寿命の実現
- ③ QOL を維持した健康寿命の実現

を目標に、基礎から応用まで、企業や他機関との連携による医薬品等の研究・開発を推進します。本研究所には、「生化・代謝学部門」、「栄養科学部門」、「食品科学部門」、「糖鎖科学部門」、「遺伝学部門」および「発生・進化学部門」を設け、以下のキーワードを中心に研究を推進します。

- ① 健やかな育ち～健やかで活力と意欲ある子どもたちの育成
- ② 活力ある暮らし～QOL の向上と健康維持
- ③ 元気な老い～QOL を維持した健康寿命を実現
- ④ 応用・開発～企業や他機関との連携による医薬品等の開発研究

【人間発達教育科学研究所 (IEHD)】 <http://www-w.cf.ocha.ac.jp/iehd/>

「人間発達教育科学研究所 (Institute for Education and Human Development)」は、お茶の水女子大学の人間発達科学をテーマとする学内教員を組織し、人間の発達と教育に関する総合的、国際的な研究拠点を構築することをめざして、2016年4月に設置されました。人間発達に関する基礎研究と実践研究・臨床研究を結びつける中から、革新的・効果的な成果発信と提言を行ない、子ども達の教育的・社会的格差の解消を志向する研究などを含め、少子化を質的・量的に改善する施策や、子どもから青年期以降までの発達の質の向上に向けた施策の策定に貢献することを目標としています。

本研究所では、以下3部門で組織され、各々の研究事業を進めています。

① 保育実践研究部門

乳幼児期の保育・教育の向上、保育者の育成、地域子育て支援の開発に関して統合的に、学内の3つの乳幼児施設（附属幼稚園、ナーサリー、こども園）に加え、地域との連携も図りながら研究を行うと共に、乳幼児保育・教育のカリキュラムおよび学生・保育者・社会人向けの学習・研修プログラムの開発と評価に関する研究も行います。

② 人間発達基礎研究部門

子ども期から老年期までの人間の生涯発達について、心理学、認知科学、教育学、社会学の方法論を用いて、人々の心身の健康や格差など社会的問題の解決に資する理論的・

実証的知見の蓄積を行います。

③発達臨床支援研究部門

発達障害（自閉症スペクトラム症、注意欠如多動症など）を有する子どもや青年への支援に関する調査研究をはじめ、支援が求められる家庭や地域、福祉や教育の現場などに実際に関わりながら、そこに生きる人々を支援するプログラムやコンサルテーション技法などの介入方略や理論を検討していきます。

2. 機構における活動実績

※2024年度は2024年10月まで。各実績の詳細については第2部、第3部で報告。

【論文発表数の状況】

※2024年度は10月まで

	ヒューマンライフサイエンス研究所		人間発達教育科学研究所		合 計	
		うち英文		うち英文		うち英文
2022年度	77	57	71	15	148	72
2023年度	68	52	63	17	131	69
2024年度	45	29	39	9	84	38

【国際学会等での発表の状況】

※2024年度は10月まで

	ヒューマンライフサイエンス研究所		人間発達教育科学研究所		合 計	
		うち口頭		うち口頭		うち口頭
2022年度	27	3	8	2	35	5
2023年度	19	7	19	5	38	12
2024年度	11	3	29	11	40	14

【国際学会等での講演等】

※2024年度は10月まで

	ヒューマンライフサイエンス研究所		人間発達教育科学研究所		合計	
		うち招待講演		うち招待講演		うち招待講演
2022年度	1	1	3	1	4	2
2023年度	3	3	9	0	12	3
2024年度	2	2	7	1	9	3

【シンポジウム等開催実績（ヒューマンライフサイエンス研究所）】

2022年度	<p>2022. 11. 2 「ヒューマンライフイノベーション開発研究機構」シンポジウム 健康で心豊かな「人生」を科学する～こころとからだ～ (オンライン：機構主催：共催)</p> <p>2022. 12. 16 「ゲノムが決める老化と寿命」(共催)</p> <p>2023. 12. 24 「HD Video Recorder of the Cell」(オンライン：後援)</p> <p>2023. 1. 26 国際セミナー「Emotion dysregulation as a atransdiagnostic process found in psychiatric and neurodevelopmental disorders」(機構主催：共催)</p> <p>2023. 3. 16 文理融合学内科研 研究発表会「脂質摂取行動パターンが 及ぼす心理・器官変容の解明—文理融合研究が導く理学基 礎研究の心理学的活用—」(オンライン：機構主催：共催)</p>
2023年度	<p>2023. 10. 25 講演会「日米比較から考える ゲノム医療と遺伝子診断」 (後援)</p> <p>2023. 12. 13 生物学科&HLS 研究所共催セミナー 「植物における脂質膜を介したストレス応答について」 (共催)</p> <p>2023. 12. 15-17 第14回日韓3女子大学交流合同シンポジウム(共催)</p> <p>2024. 1. 31 お茶の水女子大学 遺伝カウンセリングコース 開講20周年特別講演会(共催)</p> <p>2023. 2. 9 ヒューマンライフサイエンス研究所セミナー 「あなたの体の中で本当にダイナミックに生きている 細胞力を生かすからだの使い方」(主催)</p>

	<p>2023. 2. 17 「第 26 回健康栄養シンポジウム 人体最大器官 ＜皮膚、血管、骨格筋＞の 健康維持と栄養」（後援）</p> <p>2023. 2. 20 生物学科セミナー 「Ticks and tick-borne diseases in human health.」 （共催）</p> <p>2024. 2. 27 お茶の水女子大学 ヒューマンライフイノベーション開発 研究機構 2023 年度 研究交流会（機構主催：共催）</p> <p>2023. 2. 29 ビタミン B 研究委員会 2023 年度シンポジウム「病因・病 態解明を目指した酵素研究」（共催）</p>
2024年度	<p>2024. 5. 29 むずかしいことをやさしく やさしいことをふかく ふかいことをおもしろく ～健康・医療など専門的情報を多くの人に届けるための “テレビプロデューサー的” コミュニケーションの秘訣 ～（主催）</p> <p>2024. 6. 21 生物学科セミナー「What happens when sperm meets the egg: New insights into the fertilization process」 （共催）</p> <p>2024. 8. 24 「AI 時代の人間の創造性、想像力」（主催）</p> <p>2023. 8. 24 2024 年度 生物高分子学会シンポジウム ～生活科学部・ 理学部・工学部の生物高分子研究～（後援）</p> <p>2023. 9. 7 第 10 回 MatriCell フォーラム（共催）</p> <p>2023. 10. 12 日本レチノイド研究会 第 35 回学術集会「ビタミンの新機能と創薬」（後援）</p> <p>2023. 12. 6 生物学科&HLS 研究所共催セミナー「遺伝 子抑制に重要なエピジェネティック修飾の標的選択と環 境ストレス制御」（共催）</p> <p>2023. 12. 10-12 2024 年度 第 15 回日韓 3 女子大学交流合同シンポジ ウム（共催）</p> <p>2023. 12. 20 生物学科&HLS 研究所共催セミナー「疾患を引き起こす 有害コピー数多型推定の進化的アプローチ」（共催）</p>

【シンポジウム等開催実績（人間発達教育科学研究所）】

2022年度	<p>2022. 9. 1-3 第 7 回お茶の水女子大学ライフ×アート展 記録展～子 どもにふれる～（共催）</p> <p>2022. 11. 2 「ヒューマンライフイノベーション開発研究機構」シンポジウム 健康で心豊かな「人生」を科学する～こころとからだ～</p>
--------	--

	<p>(オンライン：機構主催)</p> <p>2023. 1. 26 国際セミナーEmotion dysregulation as a a transdiagnostic process found in psychiatric and neurodevelopmental disorders (機構主催)</p> <p>2023. 3. 16 文理融合学内科研 研究発表会「脂質摂取行動パターンが 及ぼす心理・器官変容の解明—文理融合研究が導く理学基 礎研究の心理学的活用—」(オンライン：機構主催)</p> <p>2023. 3. 19 お茶大附属学校園(連携研究算数・数学部会)第6回統計 教育シンポジウム</p> <p>2023. 3. 21 第7回お茶の水女子大学大こども園フォーラム(オンラ イン：一部オンデマンド：共催)</p> <p>2023. 3. 21 お茶大心理臨床相談センター第2回公開セミナー「女性の 人生と心理臨床」(オンライン：後援)</p>
2023年度	<p>2023. 6. 14 国際セミナー「心理的援助要請に関する日伊比較」(主催)</p> <p>2023. 6. 25 お茶大発子育て応援プロジェクト「第1回 お茶大*のび のび子育てサロン(共催)</p> <p>2023. 7. 21 国際シンポジウム「世界の幼児教育は、今～UNESCO/タ シュケント国際幼児教育会議の成果から」(オンライン： 主催)</p> <p>2023. 8. 29 「自己」研究会シンポジウム「AI 社会・技術拡張化への 「自己」の適応—新たな「自己」研究—」(ハイブリッド： 共催)</p> <p>2023. 9. 22 第1回お茶大のびのび子育てサロン「暮らしの中で楽しむ 乳幼児の運動遊び」(共催)</p> <p>2023. 9. 24 CEDEP 公開シンポジウム「子ども政策の総合化を考えるⅢ 保育幼児教育の公共性(2023. 9. 24)」を開催(オンライン： 共催)</p> <p>2023. 10. 4 IGI Tokyo / Sex & Gender Australia webinar(オンラ イン：共催)</p> <p>2023. 10. 19 第1回認知発達科学セミナー「自閉スペクトラム症者の 非定型な知覚に関する基礎的・応用的検討」(主催)</p> <p>2024. 1. 20 シンポジウム「自己の科学は可能か：心身脳問題として 考える」(ハイブリッド：共催)</p> <p>2024. 2. 18 第2回 お茶大*のびのび子育てサロン～お茶大発子育 て応援プロジェクト～(共催)</p> <p>2024. 2. 27 お茶の水女子大学 ヒューマンライフイノベーション開発</p>

		<p>研究機構 2023 年度 研究交流会（機構主催）</p> <p>2024. 3. 2 お茶大心理臨床相談センター第 3 回公開セミナー「メンタルヘルスのヤングケアラー～外から見えにくい「ケア」へのまなざし～」(オンライン：後援)</p> <p>2024. 3. 17 第 7 回 統計教育シンポジウム「学校の算数・数学で学ぶ統計の“光と影”～学びにくさ/教えにくさについて語ろう～」(オンライン：共催)</p> <p>2024. 3. 23 第 8 回お茶の水女子大学大子どもフォーラム（後援）</p> <p>2024. 3. 29 「自己」研究会 2024 年度春のシンポジウム「AI 社会における適応的な「自己」の表現や発達を考える～脳・AI・仮想空間に現れる「自己」の参照～」(ハイブリッド：共催)</p>
2024 年度		<p>2024. 4. 16 2024 科学技術週間 「自己」研究会 ミニシンポジウム AI、仮想技術、ロボットが進展する社会で、私らしく生きるには？新たな技術への向き合い方と「自己」(オンライン：共催)</p> <p>2024. 6. 9 第 3 回 お茶大*のびのび子育てサロン（共催）</p> <p>2024. 6. 13 第 2 回認知発達科学セミナー「抑うつの認知バイアスの研究と新しい展開」(ハイブリッド：主催)</p> <p>2024. 6. 29 第 12 回子どもの教育・支援について語り合う会「発達障害のある子どもと家族の暮らしと育ちを支える地域づくり～臨床・研究・政策をつなぐ～」(オンライン：後援)</p> <p>2024. 8. 3-5 アンドレア・スカランティーノ教授による国際ワークショップ・講演会・セミナー（共催）</p> <p>2024. 8. 24 「AI 時代の人間の創造性、想像力」(連携主催)</p> <p>2024. 8. 31 第 13 回子どもの教育・支援について語り合う会「自閉症スペクトラム症の“コミュニケーション障害”について」(オンライン：後援)</p> <p>2024. 9. 10 「自己」研究会 2024 年秋のシンポジウム「AI 社会における自己表現 —美術史や進化発達、教育や臨床の視点を通して浮かび上がる適応的な自己表現—」(ハイブリッド：共催)</p> <p>2024. 10. 20 第 4 回 お茶大*のびのび子育てサロン(共催)</p> <p>2024. 11. 1 第 2 回「暮らしの中で楽しむ乳幼児の運動遊び」(共催)</p> <p>2024. 12. 21 国際シンポジウム「世界の幼児教育は、今：Part2 タイと日本における 0-3 歳の課題を考える」(オンライン：主催)</p>

2025. 1. 10	第 1 回心身の健康に関する基礎的研究セミナー：若年労働者のメンタルヘルス支援を考える～基礎研究と実践研究から（オンライン：主催）
2025. 2. 18	第 3 回認知発達科学セミナー（オンライン：主催）
2025. 3. 1	お茶大心理臨床相談センター第 4 回公開セミナー（後援）
2025. 3. 20	第 8 回お茶の水女子大学大こどもフォーラム（後援）

【ニュースリリース（メディア掲載）件数】

※2024 年度は 10 月まで

2022 年度	ヒューマンライフサイエンス研究所 1 件 人間発達教育科学研究所 8 件
2023 年度	ヒューマンライフサイエンス研究所 6 件 人間発達教育科学研究所 12 件
2024 年度	ヒューマンライフサイエンス研究所 23 件 人間発達教育科学研究所 19 件

【受託・共同研究の状況】

○受託研究

	ヒューマンライフサイエンス研究所		人間発達教育科学研究所		合 計	
	件数	金額（円）	件数	金額（円）	件数	金額（円）
2022 年度	17	118,808,645	3	7,629,343	20	126,437,988
2023 年度	21	110,952,647	4	9,476,000	25	110,952,647
2024 年度	20	157,213,307	4	9,426,628	24	166,639,935

○共同研究

	ヒューマンライフサイエンス研究所		人間発達教育科学研究所		合 計	
	件数	金額（円）	件数	金額（円）	件数	金額（円）
2022 年度	10	5,255,000	2	0	12	5,255,000
2023 年度	15	9,990,000	2	0	17	9,990,000
2024 年度	15	7,270,000	6	4,125,169	21	11,395,169

3. 機構における文理融合型共同研究（学内科研）

お茶の水女子大学では、2014年度より、異なる研究分野による文理融合型研究プロジェクトへの支援を通じ、本学における研究の質の向上、および研究活動の活性化を目的として「共同研究用経費（学内科研）」が開始された（文理融合型プロジェクトへの支援としたのは2017年度から）。毎年度、1～2件程度に対して支援上限額は年間200万円で運用されており、ヒューマンライフイノベーション開発研究機構では、2022年度に1件採択された（過去には、2018年度に1件、2020年度に1件採択）。

研究テーマ：脂質摂取行動パターンが及ぼす心理・器変容の解明 -文理融合研究が導く理学基礎研究の心理学的活用-

【2022年度採択：100万】

（1）研究メンバー

※採択当時の所属・職位

【研究代表者】

宮本 泰則（ヒューマンライフサイエンス研究所・教授）

【研究分担者】

大森 美香（基幹研究院人間科学系・教授：人間発達教育科学研究所長）

市 育代（基幹研究院自然科学系・准教授：ヒューマンライフサイエンス研究所）

内海緒香（人間発達教育科学研究所・特任准教授）

松本聡子（人間発達教育科学研究所・特任アソシエイトフェロー）

橋本 恵（お茶大アカデミック・プロダクション・特任助教）

（2）研究目的

わたしたちは各々の深層心理を基盤に、固有の脂質摂取行動パターンをもつ。申請者らはこれまでに、最大の栄養代謝器官である肝臓が、脂質摂取パターンに応じて病理学的・細胞学的な表現型を繊細に変えることを見出してきた。一方で脳は、その機能重要性ゆえに頑丈な物理的バリアにより他臓器と隔離される性質を有するため、脂質をはじめとする食事栄養からの影響を受けにくいとされてきた。しかし興味深いことに、申請者らは、実験動物マウスに脂質を過剰に与えると、神経細胞や免疫細胞動態を大きく変える傍証を見出した。特に、脂質過剰摂取により神経細胞の脆弱性が顕著に起こる結果は、脂質摂取行動が思考や記憶、さらには末梢器官状態にも影響しうる可能性を示唆している。本研究では、脂質の欠乏や過剰摂取によって肝臓や脳がどのような変容を示すか、その分子細胞学的機構を解明する。さらに、マウスを用いた基礎科学の枠を超え、脂質にフォーカスした食行動パターンが思考や記憶とどのように連動するかを心理学的に解析し、わたしたちの

生活により適応する知見を得る。本研究により、文理の密な連携が特色である本学の強みを活かした文理融合モデルのひとつとして、食行動が分子レベルから心理レベルの様々な階層に及ぼす影響を広く提示する。

(3) 調査の概要

本研究は、基礎科学側面と心理学側面から、脂質摂取パターンが生体や思考状態とどのような相関性を示すか、その知見を提示することを目的に以下3つの研究項目を実施する。

- I. 脂質過剰摂取が及ぼす脳神経脆弱性
- II. 脂質欠乏が誘発する肝機能及び脳機能の低下
- III. 脂質摂取パターンの規定因の解明

I. 脂質過剰摂取が及ぼす脳神経脆弱性 (生物学パート, 宮本・橋本担当)

本項目では、マウスを用いて脂質過多が中枢神経病理に与える影響を解明する。申請者らは、高脂肪食(choline-deficient, L-amino acid-defined, high-fat diet)をマウスに与え、脂肪肝炎を激しく誘導する系を確立した。申請者らの予備実験により、この高脂肪食投与は、神経細胞障害や免疫細胞の脆弱性を誘発することが明らかになりつつあり(図2)、より詳細な解析が必要である。そこで、高脂肪食をマウスに10週間与え、脳における神経細胞数、グリア細胞数を計測し、脂肪過多が神経細胞の減少やグリア活性に影響を及ぼすことを示す。また、Y字迷路を用いた行動解析を行うことで、高脂肪食による記憶・思考力がどのように変動するかを解析する。さらに、高脂肪食により神経細胞減少が引き起こされるメカニズムの解明を行うため、脳内遺伝子発現変動をRNA-sequencingにより網羅解析し、脂質を多く摂取することで変動する分子を突き止める。

II. 脂質欠乏が誘発する肝機能及び脳機能の低下 (栄養学パート, 市担当)

ヒトには食事から摂取しなければならない必須の脂質がある。本項目では、高度不飽和脂肪酸という必要な脂質が欠乏したマウスを用いて肝臓や脳機能に及ぼす影響を明らかにする。これまで、申請者は高度不飽和脂肪酸が欠乏したマウスにおいて脂肪肝が悪化することを報告している(FEBS letter, 2021)。本研究では、このマウスを用いて脂質の欠乏が肝臓において脂肪蓄積だけでなく、炎症や繊維化などの病態に及ぼす影響について検討する。また、脳において高度不飽和脂肪酸は神経新生やシナプス小胞などの機能維持に重要であることが知られている。そこで、脳の詳細な脂質解析を行い、これらの脳における脂質変化が学習・記憶力に及ぼす影響について行動学的及び免疫組織学的手法を用いて検討を行う。本研究では、欠乏という観点から肝臓及び脳における脂質の重要性を提示する。

III. 脂質摂取パターンの規定因の解明 (心理学パート, 大森・内海・松本担当)

生物学・栄養学パートで明らかにした脂質摂取パターンが脳機能を変化させる分子生物学的な

知見を、ヒトの生活行動へ反映させるアプローチ研究を遂行する。脂質摂取のパターンは各個人が持つ脂質摂取に関する態度や知識、そして購買行動が反映していると考えられる。本研究では、食品購買行動、食行動、生活習慣などにフォーカスしたウェブ調査を実施し、適正な脂質摂取に関する態度・知識や購買行動の規定因となるような心理的特性の解明をおこなう。本研究で行う動物実験は、お茶の水女子大学組換え DNA 実験安全委員会及び動物実験委員会の承認を得て適切に行う体制が既に整っている。また、必要な研究技術も既に取得しているため、確実に遂行可能である。

※本研究の研究成果は、2023年3月16日、学内限定の「文理融合学内科研 研究発表会」にて成果発表された(pp.22-24 参照)。

4. 機構主催および学内連携イベント

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構シンポジウム ～健康で心豊かな「人生」を科学する～こころとからだ

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構（「ヒューマンライフサイエンス研究所」・「人間発達教育科学研究所」）は、第4期の目標として、本学の強みである既存領域の融合や架橋をさらに強め、科学的視点から「こころ」「からだ」の実態をとらえる新たな研究分野の提唱をめざしている。この新たなビジョンに向けた第4期のキックオフイベントとして、「健康で心豊かな「人生」を科学する～こころとからだ～」と題したシンポジウムを開催した。

基調講演の演者として、脳神経科学研究分野のトップランナー東北大学副学長の犬隅典子氏をお招きした。同氏は、長年にわたり心身両面の健康に関わる領域横断的な大型研究プロジェクトを推進されており、その知見や研究実践のご講演から、こころとからだの文理融合研究のあり方について有益な示唆が得られた。その後、各研究所の研究紹介と所員による研究紹介が行われ、所員の優れた研究実践を機構全体で共有し、学内外の参加者に紹介する機会となった。また、来賓として、東京大学大学院特任教授で食科学研究の第一人者であり、一般社団法人バイオインダストリー協会の代表理事・会長でもある阿部 啓子氏をお招きし、来賓挨拶とシンポジウムの講評をいただいた。

講評では、2つの研究所が今後連携して行く可能性や必要性、具体的な方向などについて助言を受けた。上記を通して、今後望まれる健康長寿社会の実現及び持続可能な社会・環境



を形成するエコシステム創出に向けた研究推進・連携のあり方について、学内外の参加者と共に検討する機会となった。

【日時】2022年11月2日（水）13:30～16:30

【場所】お茶の水女子大学（オンライン）

来賓 阿部先生、基調講演 大隅先生が来学くださり、国際交流留学生プラザ 2F 多目的ホールにて対面とオンラインのハイブリッドで開催。

【主催】ヒューマンライフイノベーション開発研究機構（ヒューマンライフサイエンス研究所、人間発達教育科学研究所）

【対象】本学教職員、学生、一般ほか

【参加費】無料（要事前申込：締切 10/31）

【申込者数】179名

【参加者】オンライン 141名 国際交流留学生プラザ 54名 計 195名

【プログラム】

13:30～13:35 開会挨拶 佐々木泰子（お茶の水女子大学 学長）

13:35～13:40 ご来賓挨拶 阿部 啓子先生

（東京大学 大学院農学生命科学研究科 特任教授・
一般社団法人バイオインダストリー協会 代表理事 会長）

13:40～14:30 基調講演 大隅 典子先生

（東北大学副学長・東北大学大学院医学系研究科 教授：
神経発生学・発生発達神経科学）
「DOHaD：健康や疾病の発生的起源」

14:30～15:20 ヒューマンライフサイエンス研究所

研究所紹介 藤原 葉子（HLS 研究所長・教授：栄養科学）

研究所員による研究紹介

①「低栄養が関連する疾患における脂質栄養の重要性」

市育代（准教授：脂質栄養学）

②「外傷性脳損傷修復における環状ホスファチジン酸の効果」

宮本 泰則（教授：神経生物学・分子細胞生物学）

15:20～15:30 休憩

15:30～16:20 人間発達教育科学研究所

研究所紹介 大森 美香（EHD 研究所長・教授：健康心理学）

研究所員による研究紹介

①「私たちは、どう若者でなくなるのか

—現代日本社会における「後期若者」に注目して—

大多和 直樹（准教授：教育社会学）

②「青少年の自傷行為はどのような意味をもつのか
—自傷と他害，被害と加害の関係から—」

高橋 哲（准教授：犯罪心理学）

16:20～16:25 講評 阿部啓子先生

16:25～16:30 閉会挨拶 石井クンツ 昌子

（理事・副学長：ヒューマンライフイノベーション開発研究機構長）

＜司会 小暮 光生 研究・産学連携課 課長＞



来賓挨拶・講評 阿部啓子 先生



基調講演 大隅 典子 先生

【アンケート結果】参加者～195名（オンライン141名、対面54名）

アンケート回答者～67名（回収率34%）

1. プログラムの内容はいかがでしたか。

1. 満足・・・・・・・・・・46名（68.7%）
2. やや満足・・・・・・・・・・20名（29.9%）
3. やや不満・・・・・・・・・・1名（1.5%）
4. 不満・・・・・・・・・・0名

2. 今回の内容は今後のご自身の研究・活動のにとって有益だと思いますか。

1. そう思う・・・・・・・・・・37名（55.2%）
2. ややそう思う・・・・・・・・・・30名（44.8%）
3. あまりそうは思わない・・0名

＜参加者から寄せられた意見・感想＞

- ・ 聞きごたえのある内容でした。
- ・ お茶の水女子大学の取り組み、ご講演をされていた先生方の研究内容や取り組みのことをよく理解できた。特に、大隅先生の遺伝子と発達障害の関係、特に自閉症についてのお話はとても興味深く聞いた。妊娠と父母の年齢の関係の話が印象に残った。ま

た、少年鑑別所における青少年の自傷行為とその理由、また生育環境についてのお話
も大変興味深かった。自傷行為や自殺といった事柄は日常では話題に上がりづらく、
取り扱うのは難しい問題のように思うが、もし困っている人がいたらこのような研究
成果を少しでも知っていれば接する際の心持ちは大きく変わるのではないかと感じ
た。自身は中学校、高等学校の教員になる予定でいるが、困っている生徒たちに必要
な援助を届けられるよう、勉強を続けたいと思った。

- ・ これまであまり良く知らなかった研究分野のお話を幅広く伺うことができ、とても勉強になりました。
- ・ 特に、ご講演後半部の先生方の説明がとても有益でした。
- ・ DOHaD については授業で聞いたことがありましたが、それが子の将来の生活習慣病だけでなく神経発達障害にも影響があるということは初めて知り、驚きました。他の先生方のご講演も大変興味深かったです。
- ・ 私の専門分野は食・栄養で、普段あまり拝聴する機会のない心理学系のご研究の紹介が大変興味深かったです。また、大隅先生の基調講演の最後に、インクルーシブな社会に向けた提言をされていて、それが心に残りました。
- ・ いずれのご発表も臨床研究の側面があり、とても貴重なご研究についてご共有頂きました。ありがとうございました。
- ・ 学術的な内容に刺激を受けました。ウェブ配信(しかも無料!)されたことに感謝します。
- ・ 「後期若者」は初耳でしたが、元気・健康志向の表われかもしれないと思いました。
- ・ 食を基点とした文理融合型研究に大変興味を持ちました。今後のさらなる発展を祈念いたします。
- ・ よく知っていることもあったが、分かりやすく役に立つものでした。これからもよろしくお願ひします。できれば、レジメ的なものでも出していただければ幸いです。
- ・ DOHaD の講演が特に良かった。POHaD、大変興味深い。
- ・ 実装研究、融合研究・大型研究、誇大広告は今後の研究への参考になりそうです。
- ・ 私自身は、理系で栄養研究をしておりますので、これまで文系の先生の研究報告を聞く機会はあまりなく、とても新鮮でした。人間の健康はまさにこことからだ両面からの影響をうけますので、ヒューマンライフイノベーション開発研究機構の理念や研究部門の構成は非常に魅力的だと感じました。現存の研究部門の研究に加え、各研究室の研究ののりしろとなる研究やディスカッションが活発化されるとよいと感じました。一層のご活躍を期待しています。
- ・ とっくの昔に若者を卒業した 77 才老女です。理解不能が多かったが興味深いのもあった
- ・ 「こことからだ+食」楽しみです。まとめたものがありましたら購入したいです。
- ・ 幅広いテーマでの話が聴けたことは、たいへん興味深く、素晴らしかった。特に父方

老化に関する内容が興味深いものでした。

- ・ 基調講演はとくに興味深く拝聴した。改めてエピジェネティクスの作用が広範に在ること、人間の疾患～とくに精神機能にまでかなり作用していることに少なからず驚いた次第。
- ・ 他の研究報告にも同じようなものを感じたところは、(ど素人の感想ではあるが) 以前なら科学的ではない・神話であるというように断じられた課題が、一周廻って深化して、科学的裏付けをもって確証を得ているものが見受けられることで、そこが面白く感じている。
- ・ 科学的知見が実際に我々の社会・困難のある個々人などに、よい影響や支援をもたらすよう念じています。
- ・ 脂肪肝の原因の一つに飢餓や吸収不良があると、初めて知った。
- ・ 後期若者の研究も興味深かった。
- ・ いつまでも若くありたいと皆思うけれど、男性の場合、モテるおやじがライフスタイルとして支持されている面があること。
- ・ 大隅先生の発表内容は本当に興味深く拝聴しました。巷で父親が高齢だと生まれる子どもの発達障害の確率が高くなる云々は聞いていましたが、その根拠はこの研究だったのかと腑に落ちました。また環状ホスファチジン酸の話は薬剤化できると治療の選択肢が増えるように思います。市先生の低栄養状態における脂質栄養は一見逆張りのようで高齢化社会の需要をよく捉えた研究テーマと思いました。阿部先生の褒めるだけでない講評もとても良かったです。おっしゃる通り大型の共同研究や国際発表、社会への還元などは大切な要素と思いますが、そのためにはサイエンスの視点だけでない調整ができるコーディネーター役も必要と思います。引き続き今後も良い成果が上がることを期待しております。
- ・ 私はもう退職しており、分野も異なることから、2のお答えは出来ませんでした。管理栄養士養成課程の教員でしたので、大変興味深く聞かせて頂きました。ω3脂肪酸が重要であること、高齢出産は精神疾患の可能性が高まること、自傷行為と自殺との関係など、大事な研究がさらに発展することを期待しています。
- ・ 親の栄養状態や加齢が子どもの健康に影響するという話は聞いたことがありましたが、自閉症と大きく関わっているというのは少し意外に思いました。原因となり得る母体要因の中に脂質栄養がありましたが、後の市先生のお話を聞いて、質の良い脂質は胎児形成から高齢者の健康まで重要な役割をもつことがわかりました。昔に比べて現代日本では多価不飽和脂肪酸を摂る機会が減っていると思いますが、魚などを意識した食事を自分はもちろん周りの人にも促したいです。また、精子の老化については、年齢が上がるにつれて、母親よりも父親の加齢が自閉症発症に影響しやすいということに驚きました。子どもの先天的な病気は母親の責任にされやすい傾向があると思うので、精子の老化による影響ももっと認識されるべきだと思いました。また、精

子の DNA の低メチル化が第二世代に伝わらないというのは興味深かったです。

- 最後のメッセージで大隅先生が「精子の老化は多様性をもたらすとも言える」とおっしゃっていたり、途中で東日本大震災も被害を受けたにも関わらず、「こんなことができた」というお話をされていたりして、物事をいろいろな面から捉えることのできる方だなと思いました。
- ご講演全体を通して非常に興味深く拝聴しました。母親と子供の健康・発生の関係についてはもちろんですが、父親と子どもの関係である POHad に大変関心を持ちました。ご講演の中で先生もお話されていましたが、現代の社会では母親の影響について多く言及されるにも関わらず、父親の影響についてはほぼ言及されません。近年の晩婚化による高齢出産の増加によって配偶子の老化に関しては提起されるようになりましたが、精子の老化にフォーカスした言説は少ないようです。そのため父親（配偶子含め）の状態がこれほどまで子どもの健康に影響を与えることになりかなり驚きました。動物実験では父親の低タンパク食・高脂肪食が娘の糖尿病リスクを上昇させたという結果もあるようで、非常に興味深く感じました。ヒトで同じ結果が出るかは、未だ明らかにされていないようですが、ヒトでも結果が出れば（小児の）糖尿病への応用等が期待されることが想像できます。摂取した栄養がそのまま子どもにも伝わる母親ではなく、父親の影響が娘に及ぶこと自体不思議に感じられますし、より詳細なメカニズムについても知りたいと思いました。
- また、ご講演のほとんどで自閉症（ASD 関連疾患）と親の加齢についての関係、非定型発達個体の増加の原因についてお話されていたので、「自閉症など脳・神経機能障害を減らすためには早期に出産を行うべきだ」という結論に帰結するのかと考えていました。高齢で子を持つことはリスクであることが広く知られており、それが批判されることも多くあると経験として知ってしまっているためでした。しかしお話の最後で「生まれてくる人の多様性」について触れ、高齢で子を持つことの生物学的リスクと、社会的な流れについて、はっきりと分けてお話くださりました。その点が非常に印象的で、お茶大の生物学科でこのご講演を拝聴した意味のようなものを感じました。非常に貴重なお話を伺えたことに感謝したいと思います。
- 自閉症を患う原因として母体のミクログリア炎症はたしかに CNS の神経に炎症がおこっていたら胎児に影響するかもしれないと思った。腸内細菌や薬物暴露なども原因として挙げられる。生活習慣の見直しを考えさせられた。また、父の加齢や喫煙が原因で低体重児が生まれる率が高まること、低タンパク質や高脂肪食によって娘の糖尿病率が上がるなど日々の自分たちの生活を丁寧に生きるということの大切さを学びました。しかし、父の加齢や母体の炎症や腸内細菌なども自閉症の原因の一部でしかなく、また大隅先生もおっしゃったように様々な年齢の親から生まれ、様々な環境で育つからこそ多様性が生まれることから必ずしも加齢や不健康、肥満の父親は子どもを作ってはいけない！とは言えないが、はやくに出産することの子への身体的リスクの

低さを意識することができた。しかし日本では、結婚、出産の年齢は上がってきているし（大隅先生はそろそろ頭打ちになるとおっしゃいましたが）早くに出産できる環境や社会作りも進めていかなければならないと思った。

- ・ 精子に関するお話が興味深く感じました。精子の老化について、多様性と先生がおっしゃっていたことについて非定型発達の方への差別などがないという前提の必要を強く感じました。現在日本の状況を考えると、父親の年齢は今後さらに幅広くなると考えられ、精子の多様性が増加すると考えられます。したがって定型発達の人のことのみを考えた制度について見直しが求められることになると思いました。生物学の研究から社会の変化の一端が予測できるということに感動を感じました。

【社会的インパクトについて】

※①～⑤はステークホルダー

<p>社会的インパクト</p>	<p>ヒューマンライフイノベーション開発研究機構では、機構が有する「ヒューマンライフサイエンス研究所」と「人間発達教育科学研究所」を通じて、その強みとなっている既存領域の融合や架橋をさらに強め、科学の視点から「こころ」「からだ」の実態をとらえるような新しい研究分野の提唱をめざすことを第4期の目標としている。この新たなビジョンに向けた第4期のキックオフイベントとして、脳神経科学研究分野のトップランナーである大隅典子氏を招き、こころとからだの健康に関するシンポジウムを開催した。</p> <p>ト心身両面の健康に関わる領域横断的な大型研究プロジェクトを推進してきた大隅氏の知見や研究実践および両研究所の優れた研究実践を本機構全体で共有することで、今後望まれる健康長寿社会の実現及び持続可能な社会・環境を形成するエコシステム創出に向けた研究推進・連携のあり方について、本学教職員や学生、一般の参加者ととも検討・議論することができた。さらに、食科学研究の第一人者である阿部 啓子氏からは、2つの研究所が今後連携して行く可能性や必要性、具体的な方向などご意見を頂いた。</p>
<p>※社会的インパクト</p>	<p>①本機構メンバー（本学研究者） 第3期の実績や課題をふまえ、第4期の研究ミッションを遂行するうえで、学術的に極めて示唆に富む内容となり、文理を超え学問分野を融合した先端的研究の推進がいかに社会の革新において重要かあらためて認識できた。</p> <p>②その他本学教職員 本機構（研究所）の研究ミッションや最新の研究成果、文理融合研究推進の意義等について理解を深めるだけでなく、本学の第4期中期目標や高等教育機関としての社会的責任についても再認識する好機となった。</p> <p>③本学学生・院生 学生の履修過程のなかでアクセスが限られている専門（近接領域）外の研究知見</p>

ト の 範 囲 ・ 重 要 性	<p>や実践にふれることで、自身の学びを深め（広め）、学生のコンピテンシー育成に大いに寄与し得る学術イベントとなった。特に、文理双方の研究課題、研究手法、分析／検証プロセス等、より具体的な情報を得ることで、自身の研究や活動に活かすことができる。</p> <p>④学外研究機関・行政・団体等</p> <p>本学の最新の研究知見や実践にふれることで、自身が取り組む研究や事業、政策をふりかえり、アップデートすることができる。特に、社会課題の解決やSDGs推進においては、産学官民の連携・協働の可能性や今後の事業プラン策定等に向けた情報収集・意見交換も可能である（文理を超えた学術イベントのため、異業種・異分野を超えた研究・イノベーションに発展する可能性も大きい）。</p> <p>⑤一般参加者</p> <p>ふだんの日常生活で抱えている疑問や課題を、合理的・科学的に説明・解決し、新たな「気づき」や「発見」をさらなる学びへの意欲につなげることは、より良い未来を創造する変革に欠かせない人材育成にもつながる。特に、専門的な研究知見を効果的に社会実装するためには、より幅広い層への情報発信が必要であり、一方で「主体的に学び続ける市民」からのフィードバックも大切にしなければならない。</p>
--------------------------------------	---

人間発達教育科学研究所・ヒューマンライフサイエンス研究所共催
国際セミナー *Emotion dysregulation as a transdiagnostic process found in psychiatric and neurodevelopmental disorders*

お茶の水女子大学の海外協定校であるストラスブール大学（フランス）から来日中の Luisa Weiner 教授を招いて、人間発達教育科学研究所・ヒューマンライフサイエンス研究所共催で以下の通り、国際セミナーを開催した。

- 【日時】 2023年1月26日（木曜日） 15:30～16:30
- 【形式】 対面開催
- 【場所】 お茶の水女子大学 共通講義棟 2-101
- 【講演者】 Luisa Weiner 教授（ストラスブール大学）
※専門は認知心理学・神経心理学・臨床心理学
- 【対象】 学生・一般の方
- 【共催】 お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所
お茶の水女子大学ヒューマンライフサイエンス研究所
- 【参加費】 無料
- 【使用言語】 英語（通訳なし）

人間発達教育科学研究所・ヒューマンライフサイエンス研究所共催

国際セミナー
Emotion dysregulation as a transdiagnostic process found in psychiatric and neurodevelopmental disorders

日時 2023年1月26日（木）
15:30～16:30

形式 対面開催
 対象：学生、一般の方
 ※ 状況により、オンライン開催となる場合があります。郵送による参加も可能です。下記、人間発達教育科学研究所事務局より、メールにてご連絡いたします。

場所 お茶の水女子大学共通講義棟2-101

講演内容
 Emotion dysregulation (ED) refers to patterns of emotional experience or expression that interfere with goal directed behavior. ED is thought to be a transdiagnostic process involved in the maintenance of several disorders. In this talk, we will focus on the specific mechanisms of ED in different disorders and its psychological treatments via dialectical behavior therapy and compassion focused therapy.
 ※ 使用言語：英語（通訳なし）

申し込み方法 QRコード(☛)よりお申込みください

お問い合わせ 人間発達教育科学研究所 事務局
 (info-iehd@cc.ocha.ac.jp)

【講演内容】 Emotion dysregulation (ED) refers to patterns of emotional experience or expression that interfere with goal directed behavior. ED is thought to be a transdiagnostic process involved in the maintenance of several disorders. In this talk, we will focus on the specific mechanisms of ED in different disorders and its psychological treatment via dialectical behavior therapy and compassion focused therapy.

【アンケート結果】 参加者～31名 アンケート回答者～23名（回収率74%）

1. プログラムの内容はいかがでしたか。
 1. 非常に満足・・・・・・・・13名（57%）
 2. 満足・・・・・・・・10名（43%）
 3. やや満足・・・・・・・・0名
 4. 不満足・・・・・・・・0名

2. 今回の内容は今後のご自身の研究・学習・活動（例：臨床実践）の参考になりましたか。
 1. 非常にそう思う・・・・・・・・9名（39%）
 2. そう思う・・・・・・・・11名（48%）
 3. ややそう思う・・・・・・・・3名（13%）
 4. そう思わない・・・・・・・・0名

3. 今回の内容について、ご感想などを自由にお書きください。
 - ・英語で講義を聴くこと自体あまり経験したことがなかったため、貴重な体験ができました。丁寧な発表とスライドや資料のおかげで、理解できた部分が多くあり、興味深かったです。
 - ・DBTやCFTについて興味深いです。聞き取れなかったところがあるから、自分の理解が正しいかどうか不安を感じています。
 - ・若手の出席も多かったので、Q&Aの時間をもう少し設けられるとよかったですと思います。
 - ・I enjoyed the lecture very much.
 - ・EDについて最新の知見を研究者からレクチャーを受ける貴重な機会となりました。ありがとうございました。文献の出典を知りたいです。
 - ・First of all, your presentation are very clear and so easy for me to understand and acquire a lot of new knowledge. Thank you very much.
 - ・研究について方法等も詳しく教えて頂けて勉強になりました。
 - ・EDについて知識がなかったため勉強になった。ASDやADHDといった発達障害との関連を調べていらっしやるのがとても興味深かった。子どもを対象とした研究など、さらなる研究を知りたいと思った。

- ・ ED についてほとんど知識がなかったが、ADHD とも深くかかわるといのは驚きだった。さらなる研究が日本でも行われることに期待したい。
 - ・新しい視点を得られました。英語もとてもわかり易く、助かりました。
 - ・16:30 からゼミがあったため、質問時間が少なかったのが少し残念でした。この機会をありがとうございました。
 - ・ ED という視点を知ることができてよかったです。
 - ・自身の英語の実力不足で半分程度の理解となってしまいましたが、頂いた資料で理解を深めたいと思います。
 - ・全ての内容を十分に理解できたわけではないのですが、ED について、また ED と ADHD, ASD, BPD の関連について知ることができてよかったです。今までの学部の授業での知識も深まったように思います。
 - ・今後の研究の参考になりました。ED は outcome としての manifestation との切り分けも難しいと思いますが、銃弾研究などでのアプローチも必要ですね。
 - ・BPD が ED と密接に関連があることを知り、とても勉強になりました。ありがとうございました。
 - ・恥の感情を喚起させる実験手続きの侵襲性とデブリーフィングについてお伺いしたい。臨床サンプルに近い被験者の場合、パニックにならないのかなと思いました。
 - ・I am very much interested in the last research you presented about the effect of CFI on reducing self stigma. Looking forward to reading the results in the coming years. Thank you!
4. 「人間発達教育科学研究所」の今後の研究・活動に関して望むこと・期待すること、また今後のシンポジウムやセミナーで扱ってほしいテーマ等ございましたらお書き下さい。
- ・感情系のテーマ、今後も是非取り上げてほしいです。
 - ・教育現場での実践と研究についてセミナーを開催して下さると嬉しいです。
 - ・今回のように特定の障害や診断ではなく、多くの(複数の)障害に広く見られる状態や症状についての最新の知見を学ぶ機会があると嬉しいです。
5. この国際セミナーをどちらでお知りになりましたか、該当するものにチェック(✓)をお願いします。(複数回答可)
- ・教員からの紹介・・・・・・・・15名
 - ・職場からの紹介・・・・・・・・3名
 - ・研究所ホームページ・・・・2名
 - ・お茶大ホームページ・・・・0名
 - ・学内ポスター・・・・・・・・1名
 - ・その他・・・・・・・・4名(学内メール4)

6. あなたご自身について、該当するものにチェック (✓) をお願いします。

【性別】 女性・・・16名 男性・・・7名

【年齢】

10代	1名
20代	8名
30代	5名
40代	3名
50代	2名
60代	2名
70代以上	1名
未記入	1名

【職業】

お茶大 (教職員)	8名
お茶大 (学生)	10名
他大学 (教職員)	1名
他大学 (学生)	0名
公務員	0名
会社員	0名
自営業	0名
その他	1名
未記入	3名

ヒューマンライフサイエンス研究所・人間発達教育科学研究所共催

【学内限定】文理融合学内科研 研究発表会

「脂質摂取行動パターンが及ぼす心理・器官変容の解明—文理融合研究が導く理学基礎研究の心理学的活用—」

【日時】 2023年3月16日 (木) 13:00~14:50

【開催方法】 オンライン (Zoom)

【主催】 ヒューマンライフサイエンス開発研究機構

ヒューマンライフサイエンス研究所
人間発達教育科学研究所

【対象者】 学内限定 (お茶大教職員及び学生)

【プログラム】

13:00 開会の挨拶

宮本泰則 (ヒューマンライフサイエンス研究所)

13:05 前頭側頭型認知症モデルマウスにおける肝自己免疫疾患の機構解明

坂井志穂 (理学部生物学科)

橋本恵 (お茶大アカデミック・プロダクション)

宮本泰則 (ヒューマンライフサイエンス研究所)

13:30 大学生女子における家族間 Fat Talk -食行動異常・

抑うつとの関連

竹村美那 (生活科学部心理学科)・大森美香 (人間発達教育科学研究所)

13:55 高度不飽和脂肪酸欠乏による耐糖能悪化のメカニズム



堀江千尋(人間文化創成科学研究科)

市育代(ヒューマンライフサイエンス研究所)

14:20 女子大学生を対象とした食生活に関する調査

松本聡子・内海緒香・大森美香(人間発達教育科学研究所)

14:45 閉会の挨拶 大森美香(人間発達教育科学研究所)

【アンケート結果】参加者～32名 アンケート回答者～13名(回収率41%)

1. プログラムの内容はいかがでしたか。

1. 非常に満足・・・・・・・・13名(46.2%)
2. 満足・・・・・・・・10名(46.2%)
3. やや満足・・・・・・・・0名(7.7%)
4. 不満足・・・・・・・・0名

2. 今回の内容は今後のご自身の研究・学習・活動の参考になりましたか。

1. 非常にそう思う・・・・・・・・9名(53.8%)
2. そう思う・・・・・・・・11名(38.5%)
3. ややそう思う・・・・・・・・3名(7.7%)
4. そう思わない・・・・・・・・0名

3. 本研究発表会について、その他ご意見・ご感想等を自由にお書きください。

- ・大森先生のご挨拶にもありましたように、他分野の研究発表を拝聴することの重要性を改めて感じております。
- ・自身の専門以外の発表を聞くことができ大変勉強になりました。
- ・食に関する多様な視点からの発表で、大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・文理の壁を超えて交流することができ、とても楽しかったです。
- ・自分の研究領域と異なる方の発表を聞くことができ、興味深かった。一方で、専門用語の理解が追い付かない部分もあったので、補足資料等があると助かるように感じた。
- ・自分の研究活動において普段考えたことがなかった多様な視点から考えられ非常にためになった。
- ・自分は脂質とそれを代謝する器官の研究を行っていますが、脳や行動といった他分野の研究発表を聞き、脂質が影響を及ぼす範囲の広さに感心しました。
- ・学部生の研究力と発表技術の高さに驚かされました。文理融合型ということで、普段あまり聴くことのない文系の研究の話が聴けたのでとても興味深かったです。
- ・理科の研究が難しいが、面白いところもたくさんと思います。
- ・文系の研究、理系の研究は切り離されて議論される印象がありましたが、それぞれの研究結果がそれぞれに活用できるということがよくわかる内容で、非常に興味深いと感じました。

じました。心、身体それぞれではなく、いずれも考慮して検討する必要があるのかなと思いました。

- ・さまざまな角度からの学びを得ることができました

4. この国際セミナーをどちらでお知りになりましたか、該当するものにチェック (✓) をお願いします。(複数回答可)

- ・教員からの紹介 11 名 (84.6%)
- ・知人からの紹介 2 名 (15.4%)
- ・学内ポスター 2 名 (15.4%)
- ・研究所からのメール 1 名 (7.7%)

5. あなたご自身の所属について、該当するものにチェック をお願いします。

- ・本学教職員 38.5% ・本学学生/院生 61.5%

ヒューマンライフィノベーション開発研究機構 2023 年度 研究交流会

ヒューマンライフィノベーション開発研究機構では、機構が有する「ヒューマンライフサイエンス研究所」と「人間発達教育科学研究所」を通じて、その強みとなっている既存領域の融合や架橋をさらに強め、科学の視点から「こころ」「からだ」の実態をとらえるような新しい研究分野の提唱をめざすことを第 4 期の目標としています。その新たなビジョンに向け、両研究所間の学術交流を深めると共に、新たな融合研究の可能性を探るため、以下の通り「2023 年度研究交流会」を開催しました。

【日時】2024 年 2 月 27 日 (火曜日) 14:00～17:00

【場所】お茶の水女子大学 本館 3 階 306 室

【主催】ヒューマンライフィノベーション開発研究機構

ヒューマンライフサイエンス研究所
人間発達教育科学研究所

【対象】本学学部生・大学院生、教職員

【参加費】無料 (事前申込不要)

【プログラム】

- 14:00～14:05 開会挨拶
石井クンツ昌子 (理事・副学長:ヒューマンライフィノベーション開発研究機構長)
- 14:05～14:15 2023 年度総括
飯田薫子 ヒューマンライフサイエンス研究所長
大森美香 人間発達教育科学研究所長
- 14:15～15:15 融合研究への第一歩 ※発表 各 15 分



- ① ムコ多糖症 IIIC 型に対する「化学」的な取り組み
大金賢司 (IHLS: 講師: 医薬化学)
- ② 認知症モデルマウスから紐解く神経変性疾患発症機構
橋本 恵 (IHLS: 特任講師: 神経科学・分子細胞生物学)
- ③ 自閉スペクトラムのある女の子の理解と支援～あまなつ茶あむの
実践より～ 砂川芽吹 (IEHD: 助教: 障害者臨床心理学)
- ④ 「リスクな遊び」に関する保育者の経験と捉え方: 東京都内での
質問紙調査から 辻谷真知子 (IEHD: 助教: 保育学)

15:15～15:25 質疑応答

飯田薫子 ヒューマンライフサイエンス研究所長

15:25～15:45 休憩

15:45～16:45 研究紹介ショーケース (部門別) ※発表 各 5 分

- ① 宮本泰則 (IHLS: 教授: 神経生物学・分子細胞生物学)
- ② 市 育代 (IHLS: 准教授: 脂質栄養学)
- ③ 小玉亮子 (IEHD: 教授: 教育学)
- ④ 刑部育子 (IEHD: 教授: 幼児教育学)
- ⑤ 植村知博 (IHLS: 教授: 植物細胞生物学)
- ⑥ 相川京子 (IHLS: 教授: 糖鎖生物学・細胞生化学)
- ⑦ 宝月理恵 (IEHD: 准教授: 歴史社会学)
- ⑧ 齊藤 彩 (IEHD: 助教: 特別支援教育)
- ⑨ 三宅秀彦 (IHLS: 教授: 遺伝カウンセリング・臨床遺伝学)
- ⑩ 千葉和義 (IHLS: 教授: 分子発生生物学)
- ⑪ 石丸径一郎 (IEHD: 教授: ジェンダー心理学)
- ⑫ 高橋 哲 (IEHD: 准教授: 犯罪心理学)

16:45～16:55 質疑応答

16:55～17:00 総括/閉会挨拶 大森美香 人間発達教育科学研究所長
(司会 高取大典 (研究・産学連携課長))

【アンケート結果】参加者～42名 アンケート回答者～24名 (回収率41%)

1. 参加者の属性 ※ n=42

- ・ヒューマンライフサイエンス研究所・・・18名 (43%)
- ・人間発達教育科学研究所・・・・・・・・・・19名 (45%)
- ・本学教職員・・・・・・・・・・・・・・・・・・3名 (7%)
- ・本学学生/院生・・・・・・・・・・・・・・・・・・2名 (5%)

2. ヒューマンライフサイエンス研究所と人間発達教育科学研究所による文理融合研究

の推進について、ご意見やご提案を自由にお書きください。

- ・ヒューマンライフサイエンス研究所と人間発達教育科学研究所の研究紹介を含めた交流企画は、各研究所の研究を初めて知ることができ良い機会でした。一方で、文理に分ける時に、人文科学は文系、ヒトを扱わない科学は理系と分けられたため、医学部がない本学で文理を融合するにはもうひとつ融合のための議論が必要と思いました。開催ありがとうございました。
- ・食は両研究所の研究でも取り組みやすいと思うので、あまり深く追求しなくても、ミッション達成のために良いのではないかと思います。今回の交流会はとても良い試みだったと思います。発達障害児の食でも、たべやすくする工夫の提案など、いかがでしょうか。
- ・5分紹介はよかったです 時間が短いと聞きやすいです
- ・専門性の高い内容を、噛み砕きながら、当事者からのポイントレクを聞いて、興味深く感じました。
- ・本日のように各研究成果を短時間だけ眺めてもなかなか文理融合研究のアイデアは出にくいように感じた。分野外のトークについていくのに精一杯になってしまうこともあるため。定期的に、じっくり講義とディスカッションの時間を持てる、持ち回りのセミナー（例えば各回で2名、30分ずつ）の方がうまくいくのかもしれない。
- ・対面で人が見える試みは、大変良かった！一筋縄では進まない分離融合だけど、今日のような会合により、引出しが増えた感じがした。実現可能かどうかは別にして、例えば最後の高橋さんの話を伺って、植村 GABA トマトを刑務所で育てて食べてもらい、GABA の精神安定効果が再犯率低下と関連したら面白い！（^-）
- ・後半の研究紹介は、部門毎の人数の違いに応じて配分時間を考慮すべきと思う。
- ・様々な研究者の研究内容がわかり非常に意義深い時間でした。もう少し学生の参加もあればよさそう、と思いました。ありがとうございました。
- ・発表者のポインターは、可能でしたらスライド送り機能付きの緑色ポインターがあったら良かったかと思えます（赤レーザーは見えにくい方が一定数おりますので）。興味対象が一部重なっている方もいらっしゃいましたが、離れた分野も多く、まずは話せる機会やきっかけがあるのは良いかと思えます。日程は難しいかもしれませんが、今回は入試の採点と重なり部分的にしか参加できない方もいらっしゃったかと思えます。
- ・異分野のお話をお聞きできました。
- ・他分野の研究を聞く機会はあまりないので、とてもおもしろかったです。
- ・本日はありがとうございました。3時間は長かったのですが、さまざまな分野のお話をきくことができ楽しかったです。今後ともよろしくお願い致します。
- ・コロナ禍で交流する機会が減っているので、今回のようなチャンスはとても有難かったです。
- ・データサイエンス系の研究があると文理融合が進みそうだと感じました。
- ・個々の研究レベルを上げることが、融合研究の推進になると思う。

- ・教養の選択科目の授業を受けているようで、普段なかなか他の勉強をする機会がないので、とても知的好奇心が刺激されました。ついていけないこともあったので、配付資料(電子ベースでも?)があると良いかもしれません。美味しいお菓子等のご準備をありがとうございました。
- ・研究所内でそれぞれの部門がどのような研究を行っているかなかなか知る機会がなかったので、本日の研究交流会は興味深いと思いました。将来、研究職をめざす学生にも、このようなイベントを周知できるとよいのではないかと思います。休憩時のお菓子がとても嬉しかったです。ありがとうございました。
- ・共同研究のマッチングが出来るシステムがあると良いと思いました。
- ・近い領域の先生方のみならず、理系の先生方のご研究についても拝聴することが叶い、多くの刺激をいただきました。ぜひまた企画していただきたいと存じます。
- ・本シンポジウムを定期的開催するのが良いと思います。
- ・はじめて人間発達教育科学研究所の先生方の研究内容を拝聴し、非常に勉強になりました。一方で、HLS 研究所の先生方が行っている実験研究との融合の難しさも痛感しました。しかしながら具体的な融合について考える良い機会であったと思います。
- ・とても勉強になる会でした。文理融合研究は難しいと思いますが、今日のような会を通じて、両研究所の相互理解が深まると共同研究にもつながるのではないかと考えました。
- ・今回は一人15分程度であったが、もう少し発表時間を短くしてお互いの研究所の先生が何を専門にしているかが網羅的にわかる形が良いかもしれない。

お茶の水女子大学 コンピテンシー育成開発研究所／人間発達教育科学研究所／
ヒューマンライフサイエンス研究所 共同主催
「AI 時代の人間の創造性、想像力」

近年、生成 AI が急速に日常生活に入り込んでおり、人間の脳や非認知能力をどのように育ていけばよいのかに関心が高まっています。ヒューマンライフイノベーション開発研究機構では、本学コンピテンシー育成開発研究所と連携し、本学名誉教授で発達心理学がご専門の内田伸子氏と脳科学がご専門で様々な分野でご活躍の茂木健一郎氏を招き、「AI 時代の人間の創造性、想像力」をテーマに対談を含む講演会を開催し、約 300 名の方にご参加頂いた。



【日時】2024年8月24日(土曜日)14:00~16:30

【場所】お茶の水女子大学 講堂「徽音堂」

【対象】学生・教職員・一般の方

【主催】お茶の水女子大学 コンピテンシー育成開発研究所

人間発達教育科学研究所、ヒューマンライフサイエンス研究所

【共催】お茶の水女子大学附属高等学校

【参加費】無料（先着 400 名）

【プログラム】

14:00	開会挨拶	佐々木泰子(お茶の水女子大学長)
14:05	講演 「AI に負けない力～非認知能力は遊びを通して育まれる～」	内田伸子
14:55	講演 「AI 時代の人間の脳の育み方」	茂木健一郎
15:45	休憩	
16:00	対談及び質疑応答	内田伸子、茂木健一郎 コーディネーター：大森美香(お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所長)
16:25	閉会挨拶	坂元章(お茶の水女子大学コンピテンシー育成開発研究所長)
司会／進行：飯田薫子(お茶の水女子大学ヒューマンライフサイエンス研究所長)		

【開催報告】

内田伸子先生は、まず「学力格差は経済格差」であるという観点の是非について、幼児の読み書き能力習得についての調査結果を紹介されました。読み書き能力は家庭の所得とは関係がないものの、語彙習得には関係があり、子供の主体性を大事にした「共有型しつけ」が命令形の多い「強制型しつけ」に比べて語彙習得能力が高いという研究結果を示されその背景にあるものは何かを解説されました。また、「遊び」を通して子どもは「アクティブ・ラーニング（脳働学習）」をすること、非認知能力の獲得は幼少期の経験（生活・遊び）によって決まること、そして AI 時代には、遊びを通して育まれる非認知能力の育成が重要だということをお話され、「肝心なのは問うのを止めないこと」というメッセージで講演を締めくくられました。

茂木健一郎先生は内田先生のご講演内容に全面的に賛同された上で、現在の生成 AI がどのように進化しているのかを複数の映像によって示され、AI をうまく活用して人間が創造性を発揮することが重要だとお話されました。また、世界の学力観と比べて日本の学力観は古く、AI 時代には従来のペーパーテストを重視した評価軸ではなく、多様な能力や知識を考慮していくことがより重要になってくることや、創造性を育むには身体を使った学びや遊びが重要であることをお話されました。さらに、海外では能力の高い子どもがホームスクーリングで自身に合った学習環境を整えていることが受け入れられているのに対し、日

本では、集団一斉型の授業についていけないことに対しネガティブなイメージがあり、個に合った学びの多様性を担保することが重要であることなどをさまざまな資料をもとにお話しされました。

対談・質疑応答の時間には、コーディネーター大森美香先生の進行のもと、お二人の講演者と参加者との盛んな意見交換がなされました。「AI に頼ると脳が衰えるのでは？」という参加者からの質問に対して、内田先生は、AI は膨大な情報を捌(さば)くという利点があるため、例えばグーグル翻訳をメタ認知を効かせて振り返り、推敲するというように、自分で考える際の「ポジティブなツール」にするとよいと話されました。茂木先生は、将棋棋士の藤井聡太氏が、AI と対戦した後に振り返り、対策を練ることで自身を鍛えた例を示され、AI を活用した学びがあることを示されました。途中茂木先生が壇上からフロアに降りられて、参加者と対話される場面もあり、会場は多いに盛り上がりました。

講演後のアンケートには、102 名の方が回答くださり、「満足」が 90%、「やや満足」が 10%と多くの方にご満足いただいたことがうかがえるものでした。アンケートの記述には、「お二人の熱意溢れる講演内容、大変おもしろく勉強になりました」「綿密なお話の内田先生、自由に要点をしっかりと話される茂木先生、バランスがよく大変楽しい講演でした」「とても分かりやすく、堅苦しくなく、心に響く講演・対談でした」など多くの声が寄せられ、参加者にとって学びの多い充実した時間となりました。



内田伸子氏



茂木健一郎氏



対談の様子

【社会的インパクトについて】

※①～③は主なステークホルダー

社会的イン	<p>近年、生成 AI が急速に日常生活に入り込んでおり、人間の脳や非認知能力をどのように育ていけばよいのか、関心が高まっている。教育に関わる教員、子育て支援に関わる職員、家庭、児童生徒も AI とどのように付き合っていけばよいのか、活用できる部分とそうではないものについて理解することが大切である。本講演では、発達心理学の領域から内田伸子氏と脳科学の領域から茂木健一郎氏を招き、内田氏は「AI に負けない力～非認知能力は遊びを通して育まれる～」、茂木氏からは「AI 時代の人間の脳の育み方」をテーマにご講演をいただいた。講演後には、対談や質疑応答の時間も設け、参加者との議論を通して理解を深めた。内田氏は幼児教育という観点から、読み書きや語彙の習得に関する調査結果をもとに、社</p>
-------	---

<p>パ ク ト の 概 要</p>	<p>会的地位や家庭でのしつけの型との関連を解説いただいた。AI 時代における、遊びを通した非認知能力の育成の重要性を述べられた。茂木氏は、生成 AI の進化と、人間が AI を活用して創造性をどのように発揮できるかについて議論いただいた。現在の教育システムの課題と合わせて、生成 AI ではカバーできない創造性をどう伸ばしていくかが今後の課題となるであろうことを提案いただいた。</p> <p>お二人による対談・質疑応答の時間には、AI との付き合い方について参加者からの質問に答える形で、活発に意見交換がなされた。AI をツールとして活用し自分の創造性を高めることや、AI を更なる学びに活用することなど、人間と AI の共存や発展の方向性について議論が深められた。</p>
<p>※ 社 会 的 イ ン パ ク ト の 範 囲 ・ 重 要 性</p>	<p>①児童・生徒・学生</p> <p>誰もが生成 AI を活用できる昨今において、AI を活用できる範囲を学ぶ良い機会となったといえる。AI に頼りすぎることの弊害を学び、AI を正しく理解して活用することの重要性を認識することにつながった。</p> <p>②保育や教育に関わる学内外の教職員</p> <p>子育てに関わる親世代の AI 理解と AI 時代において子育てにより一層重要となる非認知力獲得についての学びを得る貴重な機会となった。乳幼児や児童、生徒とそれぞれの発達の中で AI の活用が有益な場面とそうでない場面を理解し、教育の中で取り入れるための知識を得る好機となった。</p> <p>③保護者を含む一般参加者</p> <p>AI 時代において、家庭や地域社会で育むことが期待されるスキルや能力についての理解が深まり、AI との良い距離を保ちながら活用する事例を学ぶ機会となった。膨大な情報の処理だけでなく、自らが何かを生み出すというスキルも同時に鍛えていくことの重要性を学ぶことにつながった。子育てのみならず、社会人の生産性という視点からも、思考の拡張や創造性に目を向け、見つめ直すという社会的インパクトが生まれたと考える。</p>

資料① 国立大学法人お茶の水女子大学ヒューマンライフイノベーション開発研究機構規則

平成28年3月25日

制定

改正 平成29年3月31日

令和2年3月31日

令和3年3月25日

令和4年3月29日

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学組織運営規則第6条の5第3項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学ヒューマンライフイノベーション開発研究機構（以下「研究機構」という。）に関し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 研究機構は、国立大学法人お茶の水女子大学（以下「本学」という。）の教育研究理念に基づき、人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーションを実現する教育研究拠点として、本学のこれまでの教育研究の実績や人材育成の経験を活かし、更に発展させるよう総合的、国際的な教育研究活動を行うことを目的とする。

(業務)

第3条 研究機構は、前条の目的を達成するため、次に掲げる業務を行う。

- (1) 心身の健康と生活環境の向上に資するイノベーションの創出に関すること。
- (2) 人間発達科学分野における教育研究に関すること。
- (3) ヒューマンライフサイエンス研究所及び人間発達教育科学研究所の管理運営に関すること。
- (4) その他前条の目的を達成するために必要な業務

(研究機構に置く組織)

第4条 研究機構にヒューマンライフサイエンス研究所及び人間発達教育科学研究所を置く。

2 前項の研究所に関し必要な事項は、別に定める。

(組織)

第5条 研究機構は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 研究機構長

- (2) 産学連携を担当する副学長
- (3) ヒューマンライフサイエンス研究所に所属する者
- (4) 人間発達教育科学研究所に所属する者
- (5) その他学長が必要と認めた者

(研究機構長)

第6条 研究機構長は、研究を担当する副学長をもって充てる。

- 2 研究機構長は、研究機構の業務を掌理する。

(研究機構会議)

第7条 研究機構に、研究機構の運営及び業務に関する事項を審議するため、研究機構会議を置く。

- 2 研究機構会議は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 研究機構長
- (2) 産学連携を担当する副学長
- (3) ヒューマンライフサイエンス研究所長
- (4) 人間発達教育科学研究所長
- (5) その他研究機構長が必要と認めた者

- 3 研究機構会議の議長は研究機構長をもって充て、議長は研究機構会議を主宰する。

- 4 研究機構会議の構成員は、第2条の目的を達成する上で必要な事項について、研究機構会議での審議を求めることができる。

- 5 研究機構長が必要と認めたときは、構成員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

- 6 本条に定めるもののほか、研究機構会議に関し必要な事項は、別に定める。

(基幹研究院等との連携)

第8条 研究機構は、第3条に定める業務を遂行するに当たっては、基幹研究院、他機構及び学内共同教育研究施設との密接な連携のもとに行うものとする。

(事務)

第9条 研究機構の事務は、研究・産学連携課が行う。

(雑則)

第10条 この規則に定めるもののほか、研究機構に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規則は、平成28年4月1日から施行する。

附 則（平成29年3月31日）

この規則は、平成29年4月1日から施行する。

附 則（令和2年3月31日）

この規則は、令和2年4月1日から施行する。

附 則（令和3年3月25日）

この規則は、令和3年4月1日から施行する。

附 則（令和4年3月29日）

この規則は、令和4年4月1日から施行する。

資料② ヒューマンライフィノベーション開発研究機構 第3期 最終評価実施報告書

1 はじめに（最終評価の目的等）

ヒューマンライフィノベーション開発研究機構に設置した2つの研究所（ヒューマンライフィノベーション研究所、人間発達教育科学研究所）の研究プロジェクトや事業などについて、全体構想に基づき、6年間（平成28年度～令和3年度）の進捗状況を確認の上、最終的な評価を行う。特に、令和元年度に実施した中間評価の結果を受け、研究プロジェクト、事業内容、組織実施体制等の見直し・改善が適切に遂行されているかを確認・評価した。

また、今回の最終評価に際しては、評価委員会（午後）に先立ち、これまでの研究・事業の成果に関する国際シンポジウム（午前）をオンラインで開催した。

各委員の先生方におかれては、年度末で多忙のなかご協力頂き、この場を借りて感謝申し上げます。

今回の最終評価により、第3期中期目標・計画を達成するとともに、「ヒューマンライフィノベーション開発研究機構」が自他共に認める国際研究拠点としての基盤を固め、第4期に向けたさらなる発展と進化をめざしたい。

2 評価の方法等

最終評価の実施に当たっては、本学の基幹研究院長のもと、3名の外部委員を含む計6名の委員会構成員により、あらかじめ配布・送付された最終報告書による書面評価により行われた。

最終報告書は、機構及び各研究所の概要、構成などの資料に加え、2016年4月から2021年12月までの各研究所の研究業績、シンポジウム等の活動実績等の計500ページを超える資料（全3部）を各委員によりご確認いただき、1）機構の目的に対する取り組みや進捗状況についての評価、2）融合研究に関する意見、提言、3）今後の課題についての提言、4）その他の機構の活動に関するご意見・ご提言の4つの観点でのコメントにより評価をいただいた。

また、評価委員会に先立ち開催された「国際シンポジウム」にもご参加頂き、各研究所の主要な研究プロジェクトや事業についても直接ご意見ご助言を賜りご評価いただいた。

新型コロナ感染防止対策としてオンライン(zoom)で開催された評価委員会の議事進行については以下のとおりである（国際シンポジウムのプログラムは別添資料参照）。

<ヒューマンライフィノベーション開発研究機構 令和3年度最終評価委員会>

【開催日】 令和4年3月14日（月） 14:00～17:00

【開催形式】 オンライン（zoom）

【議事進行】：

14:00-14:05 委員長挨拶、本日の議事進行説明

14:05-14:40 ヒューマンライフィノベーション開発研究機構概要説明等

- ・機構の概要説明、取組の全体構想、平成28年度～令和3年度取組実績についての説明（石井クンツ昌子 機構長）

- ・ヒューマンライフィノベーション研究所 成果概要説明

(藤原 葉子研究所長)

・人間発達教育科学研究所 成果概要説明

(大森 美香研究所長)

14:40 – 14:50 休憩

14:50 – 15:50 機構の個別研究内容説明 (6人×10分)

宮本 泰則教授、森光 康次郎教授、千葉 和義教授

内海 緒香特任講師、上原 泉准教授、今泉 修助教

15:50 – 16:35 評価委員による質疑、コメント、意見交換

16:35 – 16:50 評価委員による協議 (打合せ)

16:50 – 17:00 まとめ、今後のスケジュール確認

3 評価委員からのコメント概要

各評価委員からは、計6年間の研究・活動実績に対し、概ね肯定的なコメントをいただいた。

また、今後の課題や展開について、さまざまな視点からの指摘や提言をいただいた。

各評価委員から寄せられたコメントの概要は以下のとおりである。

(※各委員のコメントは、事務局により表現の統一などによる加筆を行っている。)

1) 機構の目的に対する取り組みや進捗状況についての評価

- ・ヒューマンライフイノベーション研究所は、多額の研究費を学外より獲得し、盛んな研究活動を展開していることが評価できる。人間発達教育科学研究所は、むしろ目の前にいる子どもや心的疾患を持つ人々のために尽力することにおいて重要な働きをしていることを評価すべきと考える。小冊子「Q&Aシリーズ」の刊行についても、特に精神医学的内容の巻が多く読まれているのは、こうした事柄について、専門家集団により信頼できる情報を出している機関が少ないためであろうが、それは社会的な地位の高さを物語っていると考えられる。
- ・機構の目的である教育研究拠点の形成のために、ユニークかつ先端的な研究が行われており、学生の発表数やQ&A集の作成・配布など教育に対しても貢献されている点は高く評価できる。
- ・各研究所のパフォーマンスについては上述のように個別の研究遂行については高く評価できる。ただし目的にあるように「国際研究拠点の構築」ということについては、少々具体策に乏しい感がある。海外研究者を招へいしてのシンポジウムなどの企画を行ってきていることは評価できるが、実質的な「国際研究拠点」としての地位を確立するには、海外から参加発表の応募が積極的にあるようなテーマの国際ワークショップやシンポジウムなどの企画が立てられることが期待される。
- ・期間中、HLI研究所と人間発達教育科学研究所では、各年度、約50～150件の論文(うち半数は英文による)、約10～70件の国際学会での発表や国際会議での講演が成果として出されており、研究・開発に関わる高い水準での活動が行われていると判断できる。期間を通して約90件にのぼるシンポジウム等が開催され、先端的な研究推進とアウトリーチ/ディセミネーションの両方が意欲的に行われており、さらに、期間を通して受託研究36件、受託事業38件、共同研究82件に加え、文理融合的な研究活動が行われるなど、国内外の研究機関や企業との連携や社会に向けた発信という目標に向けた活動も行われている。特に、

6冊のQ&Aシリーズは、一般に関心の高いトピックにつき、科学的根拠にもとづく内容を平易に伝える教材、啓発資料として有意義に用いられており（ダウンロード数などから）、これらのことから、機構の目的に対しての取り組みが達成され、成果の社会実装の進捗状況も良好であると判断できる。

- I期（2016～2017年）は、ヒューマンライフイノベーション研究所（IHLI）と人間発達教育研究所（IEHD）のどちらも、それまでに行ってきた研究・活動から機構の目的に沿う内容のシンポジウム・研究会・セミナーなどの開催が中心の時期ととらえることができると思われる。機構としての特筆すべき活動は乏しいといわざるを得ないが、異分野を融合した研究組織の黎明期の状況としては特に問題とされるものではないと考える。II期（2018～2019年）は、IHLIでは研究部門の再構築や研究プロジェクトの立ち上げ、IEHDでは大規模調査・縦断調査の実施や若手への研究推進事業の実施など、2研究所とも機構としての活動を意識した研究活動が活発化し、機構の目的である「心身の健康と生活環境の向上」に資する研究発表が飛躍的に増加し、特に英文論文数が大きく増えている点は特筆に値すると思われる。III期（2020～2021年）は、2研究所が協働しての活動が開始された時期といえる。コロナ禍もあり、協働活動の多くは2021年度の実施となっているが、状況を見ると仕方がないことと思われる。むしろ、コロナ禍で突然の遠隔授業等の変な教育を実施している中、複数の協働活動を行い、大型研究費申請を行うなど、2研究所ともよく活動したと評価される。以上、機構に設置された2研究所は、機構の目的を踏まえた活動を6年間実施したと判断する。一方で、2研究所が協働しての研究活動は緒に就いたところとも言え、その点は、今後の機構の活動に期待したい。
- 社会構造の変化に伴う社会的課題の解決を目的とする本機構は、理系主体であるヒューマンライフイノベーション研究所と、文系主体である人間発達教育科学研究所との協奏的研究によりその目的を果たしていると言える。人数が少ないながらも、様々な分野の研究者を擁するお茶の水女子大学の特徴を生かして、多方面からのアプローチが試みられており、一つ一つの研究についても興味深く、ユニークな成果を生み出している。多くのシンポジウム等のイベントも行われており、活発な活動であったことが見て取れる。
- 2020年の中間評価で、「お茶の水女子大学ならではの」観点から、「すべての女性がしあわせな一生を送れる未来づくり」といった、高い境地を目指してほしい、と提言した。昨今、健康寿命に加え、「幸福寿命」というコンセプトが登場している。これは、「死ぬ瞬間までしあわせな一生を」との考えで、慶應義塾大学の伊藤裕教授によって提唱された。生物学的な生命寿命、医学的な健康寿命、社会的な幸福寿命、これら三者が一致する、それが、人生の理想であるにちがいない。「生涯を通じて健康で心豊かな生活を過ごす」には、健康寿命の延伸に幸福寿命の延伸が伴わなければならないと、すると、必然的に、ライフサイエンス、ソーシャルサイエンス両者の協同が求められる。また、幼少期の養育から、青年期の学び、さらには、壮・老年期の学び直し・学び足しに至る、生涯を通じた学修も重要な軸となる。この意味で、次項に述べる、貴機構を構成するヒューマンライフイノベーション研究所と人間発達教育科学研究所の transdisciplinary な連携が強化され、実績も上がりつつあることは高く評価されると思う。

2) 融合研究に関する意見、提言

- 中間評価において、両研究所の融合的な研究を期待する声があったこと、また海外機関とのさらなる連携を求める声があったことは了解した。まず、ヒューマンライフイノベーシ

ョン研究所に関しては、ムーンショット計画のような大きなプロジェクトを持っていることを考えれば、学外機関との連携について、積極的な能動性を発揮していることは明らかであろう。一方、人間発達教育科学研究所に関しては、研究と実践とが強く結びついている領域であり、共同研究の相手を求めてあちこち手を伸ばすことが本来の姿とは必ずしも言えないのではないだろうか。教育や臨床医療は「イノベーション」の枠で捉えられない面があるように思う。

- これまで多くの「文理融合」を掲げているものを見てきたが、実質的な融合は非常に難しいというのが現状である。その点、本機構の実績から判断するに、かなり実質的に融合がなされた研究が遂行されていると思われる。共著として両分野の研究者名が並ぶ投稿論文の存在が、実質的な融合研究が行われた証拠になると思うが、そのような論文実績が複数あるのは非常に高く評価できる。文理の融合した研究であることが強調できるように、例えば、研究業績一覧において、両分野の著者を色分けして示し、一つの論文に両分野の著者が共著となっていることが一目瞭然となるような業績の示し方をすると、融合度合いを示すのにわかりやすいのではないかと思う。懸念される点としては、どちらかの分野が主となり、他方の分野がその補助的な役割となりがちな偏った傾向の融合形態となっていないかということである。どちらも主となるパターンが満遍なく存在することが望まれると思う。

- 機構における文理融合型共同研究として、「女子青年における食生活と心身の健康との関連に関する縦断的研究-本学学部学生を対象としたパネル調査から-」（2018 年度採択）、「発達障害児の養育等の環境要因に対する脳神経学的な解析」（2020 年度採択）が実施されている。いずれも二つの研究所の連携による心身の健康の創出を目指す研究であり、前者では大学生を対象とした心身の健康や生活習慣等の調査を踏まえ、栄養学・心理学的な知見にもとづく教育プログラムの開発が行われました。後者では発達障害をテーマとする細胞レベルの研究や感情理解、感覚異常等の心理学的研究が行われ、発達障害に関わる要因、その現れ方の多層性に対する理解が深まった。いずれも文理融合のアプローチにより、当該のトピックにおいて新しい地平を切り開くことができたと思われる。

提言としては、今後も、例えば栄養学のトピックを心理学の研究課題として取り上げたり、細胞の定量的な振る舞いと行動科学的な指標との関連性を追求するなどして、融合領域独自の課題・問題を設定し、そのような研究を支える交流を持続的に行うことで、文理融合の意義をさらに深めていかれることを期待する。また、成果の発信・社会実装から得られるフィードバックを新たな研究課題として取り入れていくことで、スパイラルな発展が見込まれると思う。そして、このような融合領域に若手研究者や、例えば、ダブルディグリープログラムなどを通して大学院生を招き入れることで、さらなる融合の拡充が図られると推察する。

- 「1. 評価」で述べたように、機構内の2研究所の融合研究は、歩み始めたところと理解している。お互いの研究内容を紹介しあうセミナーなどを機構内で定期的に持ち、お互いに寄与できることを探索する作業もあってよいように思われる。ときには、学外者にも参加してもらい、意見を聞くのもよいかもしれない。開始されているプロジェクトにおいても、協働できる余地はあると思われる。

例えば、ムーンショット型農林水産研究開発事業の代表機関となつての『誰も飢えさせない』プロジェクトが該当する。その研究成果は大いに期待される場所であるが、一方、昆虫食には、心理的抵抗感を持つ人は少なくなく、そうした心のバリアーへの対応に関す

る研究も併行することが望ましい。その点に IEHD が協働できることはあるように思われる。また、「脳の健康維持に及ぼす食の科学的・実践的アプローチ」プロジェクトは、高齢者の低栄養問題を生命科学分野から検討しようとしていると解されるが、高齢者が低栄養となる背景にはさまざまな心理社会的要因も関係しているとされており、IHLI と IEHD が協働できる点があると思われる。されには、高齢者の低栄養は女性で多いことが知られており、女性に多い理由とその予防対策まで進めることができれば、まさしくお茶の水女子大学の研究機関として大きな役割を果たすことができると思われる。

- ・中間評価の際には、文理融合研究の不足について指摘されているが、最終報告では、二つの共同研究が報告されている。中間評価の際には、機構全体としてのまとまりが感じられないと言う意見もあったが、実際に実験科学と調査研究の接点を見出すことは簡単なことではなく、その取り組みは評価すべきである。文理融合研究の進め方の開拓という側面からも、このような取り組みを通して得るものは大きいと思う。今後、継続的な取り組みによりさらに深く融合した研究が行われ、文と理とで共同研究することによる意義を示すことを期待している。
- ・研究所内の共同研究としては、ヒューマンライフイノベーション研究所における生化・代謝学部門と栄養科学部門の「脳の健康維持に及ぼす食の科学的・実践的アプローチ」、糖鎖科学部門と遺伝学部門の「腸内フローラ形成に関わる宿主因子の検証と新たな in vitro 腸内細菌培養法の開発」など今後の展開が期待される。「こころとからだのサイエンス」を纏める貴機構ですから、二つの研究所間の連携および融合研究が切に望まれる。本事業の期間内に行われた取り組みとしては、文理融合学内科研とその研究発表会、融合研究の実績としては、秋篠宮紀子特別招聘研究員ほかの人間発達教育科学研究所メンバーと神原容子特任助教ほかのヒューマンライフイノベーション研究所メンバーの共著としての『Q & A シリーズ 炎症・感染症』の刊行、日本健康心理学会第 3 4 回大会企画シンポジウム「食行動と心身の健康—心身医学・心理学・栄養学からのアプローチ—」の開催などが、transdisciplinary な連携の萌芽として高く評価される。

3) 今後の課題についての提言

- ・「Q & A シリーズ」のような啓蒙活動は意義があると考えますが、シンポジウムの開催などほどの程度有効なのかがわかりにくい。研究成果の公開ならば、専門の学会等で発表すればよいようにも思う。「また、イノベーション」に重点を置くのであれば、企業向けの周知イベント的なものがあればよいのかとも思う。あるいは、教育や医療関係のことであれば、教員や保育関係者、臨床心理士などを対象にしたセミナーの方が有効であるかも知れない（そうした職種の人なかなかセミナーに出席もできないと思うが）。

イベント類については、誰に何を伝えるためのものなのかが、もう少しはっきりした方がよいのではないか。大型プロジェクトの「キックオフシンポジウム」の類いは、何かのセレモニー的な意味合いがあるのかもしれないが、当方の属する領域では見かけない習慣である。

- ・次年度からヒューマンライフイノベーションからヒューマンライフサイエンスへ名称変更するという理由が明確ではない。個人的には主眼を「研究技術開発」から「利用・応用」へと移すという意味ではないかと思うのだが、異なる狙いがあるとすれば、その狙いを明確に示してもらいたい。イノベーション（技術革新）の実績としては、論文数や特許数が目標としてわかりやすい。しかしライフサイエンスの実績として、何を具体的に目指すの

か、という目標設定に関わる問題である。第4期の計画として、これまで得られてきた知見を活かし、「実用的アウトカムを目指した実装研究を進める」という設定は大変良いと思うのだが、何を評価軸とするのか、その設定を明確にされると良いと思う。

- 今後に向けた提言としては、本機構の目的の一つである「成果の社会に向けた発信」に関し、Q&A シリーズを英語や中国語などに翻訳し、web ページに掲載すること、また、研究の進展に応じて、一定期間ごとにアップデートしていくことなどが期待される。また、同じく、目的の一つである「国内外の研究機関や企業との連携、文理融合研究の推進」に関しては、機関間のより密な交流や、研究者・学生の相互受け入れ、上述のようなダブルディグリープログラムなどを通じた、複数の分野に卓越した研究者の輩出が望まれる。そうすることで、さらなる連携、融合的な研究の推進や、成果のアウトリーチ・社会実装を可能にするサイエンス・コミュニケーターなどの育成が可能になると思われる。

なお、国際拠点としてのさらなる発展を目指すには、外国人研究者や学生の受け入れの拡大が有効かもしれない。HLI 研究所の構成メンバー比率を見ると、女性比率は5割、若手比率が1-2割であるのに対し、外国人比率は2-4%となっている。外国人（特に若手）比率の目標値を決め、達成に向けて検討していくことで、さらなる発展が見込まれると思われる。パンデミックにより対面による国際交流が困難である一方で、インターネットを介した交流はむしろ容易になっているように思われ、こういう点も利用できるかもしれない。

- 機構における最も大きな課題の一つは、設置2研究所の役割分担の整理と思われる。言うまでもないことではあるが、文理融合は人文系と理系の研究領域を単に一緒にすればできるものではない。共通の目的とその目的に寄与できる研究分野の融合でなければ、うまくいかないことは、多くの大学で経験してきていることである。「2。」で述べたような、2研究所間の情報交換の場の設定、さらには、2研究所に留まらず、学内の研究者からのリクルートも含めて分離融合型研究の推進が求められているように思われる。

国際的な研究拠点構築の課題も大きいと思われる。海外の研究者との交流は見られているが、共同研究まで発展しその成果を発表する段階までは至っていないように感じられる。海外との研究交流、特に若手の研究者の派遣と海外からの受け入れを推進する制度を構築し、コロナ禍が収束したあとには実施できる体制作りを今から考えるとよいと思われる。

- 今後の課題としては、文系と理系が近くに存在するお茶の水女子大学ならではの取り組みである文理融合研究の発展に期待している。また、国際活動については、コロナ禍終息後の発展に期待している。
- かつて感染症が中心であった子どもの疾病構造は、いまや非感染性疾患が中心となり、虐待、肥満、心身症、発達障害、アレルギー、不登校、不慮の事故などがふえてきている。かつて Battered Child Syndrome という疾病をはじめて知ったとき、日本には対応する用語さえなく、遠い外国のできごとと思っただけだった。が、今日では、わが国のどこにも起りうる日常の問題となっている。虐待のみならず、どの非感染性疾患にも、さまざまな外因あるいは環境要因が関わっている。したがって、発達段階に即した心身の健康と環境の向上をめざす貴機構とその活動は、学術的および社会的な意義と価値を増しはすれ減ずることはないと考えられる。とりわけ、(1) 二つの研究所が協同して行う教育学および生命科学両面からの多角的なアプローチと、(2) 長期にわたる prospective な study が重要である。後者に関しては、たとえば、「小さく産んで大きく育てる」のは必ずしも正しくなかった、栄養不良だった胎児は成人すると2型糖尿病やメタボリック症候群を発症しやすい、といったイギリスからのレポートなどが参考になると思う。

4) その他の機構の活動に関するご意見・ご提言

- 学問は「人のために役立つ」ものばかりではないと思う。先生方・学生さんの研究の価値を評価するのに、「～に役立つ」ということをそんなに強調しなくてもよいのではないだろうか。当方の属する人文科学の世界から見ると、やや違和感を覚える場面があった。
- 本機構においてはお茶大ならではの取り組みを重視されていると思う。女性ならではの視点は勿論だが、付属学園との連携を規模的に考えてもこれほど密接に行える研究教育機関は珍しいと思われる。これまで人間発達教育科学研究所においては、その利点を存分に活用し、今後も活用するという計画とされているのは良いと思う。一方でヒューマンライフ側では、この利点を活用しきれていない感がある。勿論、研究分野として活用しにくい面があることは重々承知しているが、上記、3. の記述にも関わり、今後「実装研究を進める」ということであれば、その実装の場として付属学園との連携を活用することは可能であると思われ、「お茶大ならではの」ライフサイエンス研究となれば良いと期待する。
- 中間評価における意見、提言にも丁寧に対応され、国際的教育研究拠点形成、国際連携、研究テーマ、人材育成、情報発信、お茶大ならではの取り組み等について、真摯に取り組まれていることも確認した。「からだ」と「こころ」、「幼児期から高齢期までの発達に則した生活環境」は、先端研究と社会実装をつなぐ、ますます重要な領域となると思う。5年半にわたる取組みをさらに持続的に深化、拡張、更新していかれることを期待する。
- ヒューマンライフイノベーション開発研究機構の目的は、「生命科学」と「成長・発達に関する科学」の知の融合と、得られた知を基に健康で活力のある生活を送るための支援方法の開発(イノベーション)ということができるように感じている。そのように考えた場合、IHLI のサイトで掲げられている『健やかで活力ある人生を作る「こころ」と「からだ」の健康イノベーション創出』の表現は、少し違和感を覚えるところがある。「こころ」と「からだ」を入れ替え、『健やかで活力ある人生を作る「からだ」と「こころ」の健康イノベーション創出』ではどうだろうか。「からだ」の解明はメカニズム(機序)の解明であり、「こころ」の解明はコンテンツ(内容・人が生きてきた歴史)の解明と考えるからである。どちらも不可分であるが、身体がなければ心は成り立たない。IHLI の研究分野を考えると、IHLI は、こころを考えるためにもからだが大切であることをもっと打ち出してもよいのではないだろうか。
- Q&A シリーズの冊子は、2 研究所の研究成果を社会に発進する意味でも評価できる成果物と思われる。一方で、評価委員会の時にも述べたが、この冊子を小学校、中学校の児童生徒の教育に活用するには、このままでは表現、内容とも難しいと思われる。小学校、中学校の教育にも活用することを考えているのであれば、附属学校の先生方と協働した教材作成を行うのがよいと思われる。
- ASD 女兒だけのグループ活動「あまなつ茶あむ」は、女性の発達障害が注目されている現状から、タイムリーな活動と思われる。一方、女性の発達障害の人たちは、青年期以降に気づかれ、あるいは、問題が顕在化し、悩むことも少なくないことがいわれている。特に、女性の ASD では、青年期以降に自殺企図が多いことが指摘されており、青年期における精神的支えの重要性がいわれている。このようなことから、是非、青年期の女性 ASD の人を対象とした支援活動(研究に結びつけて)を考えていただきたい。
- 質問にもでていたが、冊子の利用についてもっと宣伝をしたらよいと思う。ネット上では信用できない情報が流れている中、それぞれの分野の専門の先生からの分かりやすい解説が載せられており、もっと世の中に出したらよいと思った。本が固く(物理的に)開きに

くく、表紙が硬く（デザイン的に）手に取りにくいように感じられたので、装丁を工夫すると良いと思う。また、どのような人向けなのか、「〇〇の基本を知りたい方へ」などの情報を入れるのも手に取りやすくなるかと思った。

- ・ヒューマンライフィノベーション研究所では、海外との共同研究は、2021年より再び増加傾向にあるものの、依然特定の一部教員に限られており、また、ほとんどの共同研究は未だ国際共著論文への結実に至っていないように見うけられる。2050年までを視野に入れた「ムーンショットプロジェクト」は真にすばらしいと思うが、SDGsを冠に掲げる諸研究は、SDGsの一部のGoalsの「つまみ食い」、「いいとこ取り」の感なきにしもあらず、2030年までの約束ごとであるSDGsのさらに先を見据えた中長期的な視点やグローバルな展開への意欲、ビジョンに乏しいように思われる。
- ・人間発達教育科学研究所では、第1-2期にはスリランカ児童を対象とした研究、7カ国をフィールドとした研究、国際メタアナリシスなど目を引くものがあった。第3期では、COVID-19パンデミックがautism(Kamioほか)、eating disorder risk and symptoms (Omoriほか)、food waste (Omoriほか)におよぼした影響に関する研究が光る。「国際的な研究・教育活動」を謳う貴機構だが、「国際的な拠点形成」に至るには、さらに、峰を高くし、かつ、すそ野をひろげる努力が必要かと思われる。

4 最終評価総括および今後の課題

今回、中間評価での進捗状況の報告を受け、ご意見や改善点も対応するとともに長期（6年間）にわたる取り組みについて、評価をいただいたところである。

途中、コロナ渦により協働活動の進捗が妨げられたが、その中においても高い評価を受けるに至る活動を行えたことは、今後のヒューマンライフィノベーション開発研究機構に設置した2つの研究所（ヒューマンライフィノベーション研究所、人間発達教育科学研究所）の研究プロジェクトや事業実施において、大変有意義なものであったと考える。

特に、6冊のQ&Aシリーズは、一般に関心の高いトピックにつき、科学的根拠にもとづく内容を平易に伝える教材、啓発資料として有意義に用いられており、機構の目的に対しての取り組みが達成され、成果の社会実装の進捗状況も良好であると自負している。

上記により、本学における第3期中期計画・中期目標の達成にも大いに貢献できたと自負し、今年度から開始となった第4期中期目標・中期計画においても文理融合型の研究活動を推進し、国際研究拠点の構築に向けた取り組みを行うことにより、本学の国際化をリードする機構を目指していく所存である。

(中期計画項目 (抜粋))

○研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための措置

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構(ヒューマンライフイノベーション研究所、人間発達教育科学研究所)を新設し、国際的に評価される研究成果を世界に発信する拠点として、人が生涯を通じて健康で心豊かに過ごすための研究・開発、乳幼児教育・保育の実践研究、人間発達基礎研究、養育環境と子供の発達に関する長期追跡研究や発達臨床支援研究、防災・減災を含む安全・安心な社会環境構築のための研究・開発を行う。【K17】(戦略性が高く意欲的な計画)

○教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構(ヒューマンライフイノベーション研究所、人間発達教育科学研究所)を新設し、人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーション実現のための世界水準の研究拠点を構築する。【K47】(戦略性が高く意欲的な計画)

お茶の水女子大学ヒューマンライフイノベーション開発研究機構外部評価の観点(案)

1. 機構の目的に対する取り組みや進捗状況についての評価
2. 融合研究に関する意見、提言
3. 今後の課題に関する提言
4. その他の機構の活動に関するご意見・ご提言

(参考)

(ヒューマンライフイノベーション開発研究機構の目的)

人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーションを実現する教育研究拠点として、お茶の水女子大学におけるこれまでの教育研究の実績や人材育成の経験を活かし、更に発展させるよう総合的、国際的な教育研究活動を行う。

(ヒューマンライフイノベーション研究所の目的)

人が生涯を通じて健康で心豊かな生活を過ごすための研究・開発及び安全・安心な社会環境構築のためのイノベーションを創出する国際研究拠点を構築するとともに、成果に基づいた教育プログラムを策定し社会に還元する。

(人間発達教育科学研究所の目的)

人間の発達と教育に関する総合的、国際的な研究及び調査を行い、国際研究拠点を構築することを目的とする。

国立大学法人お茶の水女子大学
ヒューマンライフイノベーション開発研究機構評価委員会

2022年2月17日現在

浅田 徹	基幹研究院長	第3条第3項
大瀧 雅 寛	基幹研究院自然科学系 教授 (その他学長が必要と認めたもの)	第3条第5項
矢 島 知 子	基幹研究院自然科学系 教授 (その他学長が必要と認めたもの)	第3条第5項
山 本 博	公立小松大学長 (外部有識者)	第3条第5項
宮 本 信 也	白百合女子大学 副学長 (外部有識者)	第3条第5項
仲 真 紀 子	立命館大学総合心理学部 教授 (外部有識者)	第3条第5項

<最終評価タイムスケジュール>

- 2021年6月23日 第1回ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議
最終評価（国際シンポジウム含む）実施について検討開始（日程、プログラム、評価委員案等）
- 9月24日 第2回ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議
日程、プログラム、評価委員の確認、決定
- 11月30日 第3回ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議
評価日程、開催方法、コメント票等の確認・検討
外部評価委員候補者への打診・内諾
- 12月 外部評価委員に対する委嘱手続き
- 2022年2月中旬 評価委員会開催通知、資料送付
- 3月14日 午前：国際シンポジウム開催（オンライン）
午後：評価委員会開催（オンライン）
- 3月31日 評価委員コメント票提出締切
- 4月 各評価委員よりコメント票回収・とりまとめ
- 5月9日 ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議
最終評価実施報告書（案）及び最終報告書（案）の検討
- 6月下旬 最終評価報告書（案）の作成
- 7月12日 学長戦略機構会議にて報告
- 7月中旬 最終評価報告書、最終報告書の公表（ウェブページ等）